
先に生きている

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先に生きている

【コード】

N0935Q

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

本当に日常の小学校を描いたお話
毎日を必死に過ごす姿は聖職者などではなく、普通の人間でしかない。
い。

子どもも大人もぜひ読んでほしい。こんなちっぽけな毎日を過ごしている人間が「先生」と呼ばれているのだと。

炉辺談話

4月某日

「ねえねえ、ちよつと聞いてよ。うちの下の子の1年生の担任、あの畠中先生になつたらしいよ。超ハズレだわ。」

「えー！畠中つてあのおばさん？残念ね〜」

「ほんとよ、去年2年生だったから、ちよつと覚悟してたのよね。だいたい、2年生の担任が1年生の担任になるじゃない。あの人、なんだかだらしなしいし、ヒステリックに叫んだりするから、幸子ちゃんなんかは、気持ち悪いって言っているのよ」

「2年生に気持ち悪いって言われるようじゃね〜小さい子に嫌われるつてよつぽどのことじゃない」

「うちの5年生は、新しく来た金子先生らしいわ」

「あ、あのメガネ？なんか調子こいてる感じする人でしょ？」

「なんだか雰囲気変わった人よね。でっかい黒縁メガネで初めはみんな怖がつて様子をうかがつてたみたいけど、けつこつ面白い人でもあるみたいね」

「実はまだ二〇代だつてさ、見えなくない？」

「え？本当？もつと上かと思つてた。34、5だと思つてたわ。それくらいでも不思議じゃないよね」

「落ち着きがあるつてことなんじゃないかしら？」

「私は三年生担任の柳先生が良かったな」

「えー、柳先生、俺、かっこいいオーラ出してるナルシストっぽくて気持ち悪くない？」

「でも、顔はまあまあかっこいいけどね」

「早見先生はかわいいんじゃない？若くてバリバリのサッカー少年つて感じ。あーゆー感じつて、子どもと年齢層近いからいいんじゃない？うちの子も、好きだつて言つてたわよ」

「あれは、かわいいんじゃないわよ。4年生のお母さん方に聞いたら、けっこうひどいって話よ」

「佐藤先生もガツガツしてて、ちょっと付き合いにくそうだしね」

「佐藤先生と柳先生って付き合ってるんでしょ？」

「え、それ初耳」

「なんか、こないだPTAの関係で柳先生と話をしたんだけど、後ろで佐藤先生じつところち睨んできたのよ。狙ってないって！佐藤先生に言いたかったくらい」

「えー、なんか意外だったなあ。佐藤先生って、もつと硬い感じの人が好きだと思ってた」

「先生だからさ、世間知らずで先生っぽくない人に惹かれるのよ」

「そう考えると、この学校の先生ってろくなのいないわね。大体、ちよつと若すぎなのよね」

「勘弁してほしいわね。うちの子、勉強できないし…ちゃんと教えてくれなさそうだから、塾とか入れようかしら？」

「やっぱり、6年生は岡部先生は安心よね」

「うーん、ちよつと暑苦しいところあるけど、子ども達も信頼してるみたいだし」

「やっぱりあれくらいの年代の男の先生に持つてもらいたいわよね」

「校長に担任変えてくれ！って言ったら変わるかしら？」

「校長じゃだめだめ、教育委員会に直接電話したらいいのよ。」

「教育委員会に電話するってモンスターペアレントっぽくない？」

「全然、今、けっこう電話する人多いのよ。うちの旦那の友達に教育委員の人らしくて。教育委員会から、各学校の校長に指示が出たりするから、結局校長先生って言っても支店長みたいなもので、権限はそんなにないって言ってたらしいわよ」

「そうなんだ。私、校長先生ってすっごい偉いもんだと思ってた」

「こないだ、テレビで見たんだけど、まず匿名の電話を教育委員会に入れるらしいのよ」

「それで？」

「匿名で、何年の担任を変えてくれって言うらしいのよ。配慮もないし、子ども達からの信頼もないって言うの。その後で、しっかりと名前を出して、変えてくれって頼みなおすのよ」

「名前出したら、めんどくさいことになるんじゃない？」

「そこは、名前を出さないで下さい、とか言えば、個人情報保護だとか何とかで、どうとでもなるらしいわ。その時に、私一人の意見じゃなくて、みんな言ってますよ！って言うのがポイントらしいわ」

「なんか嘘くさくない？」

「いいのよ。とりあえずそういう話が出たら、教育委員会から校長に話が出て、その先生に注意が行くらしいの。それで、結局やめて新しい人がくるってことも多いらしいわ」

「あ、去年いなくなった高橋先生ってそういう感じ？高橋先生、うちの学校まだ4年くらいしかいなかったわよ」

「らしいわよ。なんか、田辺さん達、すごい高橋先生嫌がってたもんね。飲み会に来て、高橋先生ってお酒飲まないでウーロン茶らしくて、酔っぱらった田辺さんが、『お前男だろ！』ってガンガン文句言ってたらしいわ。本人にはもちろん、校長とかにもさんざん話してみたよ」

「えー、そんなことで担任って変えることってできるのかしら？私もやってみようかしら？畠中先生はちょっと勘弁だわ」

「じゃあ、とりあえず匿名メールでも送ってみる？」

「フリーのアドレスとれば、バレないんじゃない？私、その辺わかるから、ちょっとやってみようかしら？」

「結局、子どもの為よね。あの先生じゃ、うちの子かわいそうよ」

「あ、もうこんな時間！武が帰ってくるわ」

「じゃあ、そろそろ今日はお開きにしましょうか。今日のお菓子代、一人三百円ね」
「はい」

金子正一の話

「これ、すみません」

畠中良子が言いながら、教頭に封筒を出しているのを見てしまった。封筒には「辞表」と大きく書いてある。辞表を出す人を初めて見たなあと、間の抜けたことをぼんやりと思った。

朝も早い七時前、職員室は俺と教頭、そして一年生の担任の畠中先生しかいない。小学校の出勤は八時までにするれば良いことになっているので、七時には職員室はまだ人がいない。

畠中先生はいつも八時ギリギリに出勤してくるので、駐車場の車を見たとき、めずらしいこともあるものだと思った。俺はいつも七時前に来て仕事を始める。朝の職員室は教頭と二人きり、会話がないわけではないが、放課後の職員室に比べれば仕事ははかどる。そんな時間の有効な使い方が好きだった。

そんないつもの朝のはずだったのだが、クラスがうまくいっていないのは、一目瞭然だったけど、まさか辞表を出すまで追い込まれているとは……こんな修羅場に巻き込まれるくらいなら、もう少し遅く来るのだった。

「いや、こんなのを出してほしいとは一言も言っていないけど」「昨日の面談で話していたことは、こういうことですよ。もういいんです。年度の途中でやめるのは心苦しいけど、どうせ私なんかは教師を辞めたほうがいいってことはわかってます」

声を荒げて、畠中先生は言った。アラフォーとは名ばかりで、45を超えているはず。四捨五入したらアラフィフなはずだったと思う。

「おはようございます」

深刻さを感じ取ってそつと職員室から抜け出るか、気づかないふりをするかの2択で後者を選んだ俺は、頭の悪そうな大きな声を出した。

「おはようございます」

畠中先生はこちらも見ないで言った。声に力はなく、涙声だったりするから心が痛い。

「ここじゃ、あれなんで、ちょっと校長室へ」

挨拶もしないで、浜田孝教頭は畠中先生を連れて校長室へ入っていた。浜田教頭は、40代前半で教頭になり、教頭としてうちの学校で3校目になる。管理職というのは、たいてい2年から3年ほどで学校が変わる。校長採用試験も受かっているとの噂が立っており、校長の椅子の空きが出るのを待っているらしい。校長待ちの時に、辞職者を出した、とでもなれば体裁が悪いのもよくわかる。浜田教頭は、苦虫をガリガリを噛んだらそうなるかも知れないな、という顔をしていた。

畠中先生と浜田教頭が校長室に入ったところで、俺は机のノートパソコンを開いた。今年度各小学校教諭に全員分支給されたものだ。最新のOSは入っているもの、中身は貧相なスペックしかない。今時、DVDも焼けない、CDも焼けない。ネットにはつながるものの、サーバーは町の教育委員会の所有なので、規制のかかっているサイトがほとんどである。公の人間のやることはどこか抜けている。俺も含めてなのかもしれないけど。

教師になって5年目、初任で3年生の担任になってから、3、4年生、1、2年生の4年間を前任校で過ごした。この学校に勤務し、5年生の担任として4か月を過ごした。

初めての高学年、初めてこの学校に足を踏み入れたその日に、「5年生、頼みますよ。若さを生かしてバリバリやってくださいね」と浜田教頭に言われた時には胸が躍った。小学校において、高学年は花形だと思っている。高学年がすごいということは、その学校がすごいということになる。五年を持つということは、六年生も持たされることが多いので、卒業担任を持たされるということにもつながる。卒業生を出す、教師になった時からの憧れだった。

我が北星小学校は、北海道の片田舎にある学年一クラスの小さな

学校だ。一年生から六年生まで一クラスずつ、それと六年生には情緒障害の児童がいる「すこやか学級」と名付けられたクラスもある。「特別支援学級」と呼ばれ、通常は六年生のクラスと一緒に行動するが、体育、音楽、家庭科、図工などの実技教科は先生とマンツーマンで学習をする。まさに「すこやか」に生活のできるクラスだ。

これには正直頭が来る。三〇人弱の子ども達を受け持つ俺たち普通学級の担任に対し、すこやか学級の先生は見るのは一人だけ。それだけ、特別な配慮の必要な子、ということなのはわかるが、三〇人の子どもを相手にするのと一人を相手にするのでは、大変さが違うのは一目瞭然だと思う。そして、何より頭に来るのが、特別支援学級の担任は給料が高い。特別支援手当、というものが出る。給料の八％。子どもが特別だからって、教師まで特別にしなくてもよからうに。

それに、教務と呼ばれる担任団の統括をする職員室における「学級委員」のような役職もある。これは、担任がスムーズに仕事ができるような様々な雑用のような仕事をする。具体的には、担任の様々な事務作業の補佐・チェック、担任不在の際の補欠、各担任への指導など、いなくても学校は回るかも知れないが、いなくなると困るポジションである。このポジションは教頭へステップアップするためのものでもあるので、各学校のミドルエイジがなることが多い。事実、我が校の教務も四十代初めの男の先生が務めている。

保健室の養護教諭、職員室の事務の先生（教職員免許を持たないの
で、役場の人間と同じような立場となる。業務は各種教材の発注・
管理、給料や旅費などの管理などがある）が加わり、それをまとめ
上げる職員室の「教師」の役割となる教頭がいる。

そして、学校全体の全責任を負う校長がいて、小学校は成り立っている。学校に勤務してわかったことだが、学校全体を動かすのは教頭だということ。だから、漫画などでは教頭はピリピリしていて、校長はニコニコしているのだ。校長は学校全体の計画を立て、どんと構えている。実務は教頭がするのだから当然である。そんなこと

も、勤務するまでわからなかった。いや、勤務して数年はわからなかった。

勤務して5年、少しずつ学校のことが見えてきた。立ち上がったパソコンを操作して、ワープロソフトを起動させる。今日、出さなくてはいけない学級通信を印刷するためだった。

学級通信というのは、「出さなければならぬもの」であるということを知ったのも、教師になってからだだった。自分が子どもの頃は毎日のように学級通信を受け取っていた気がする。先生の手書きの下手くそなイラストと共に、「今日の明彦の発表は素晴らしかった！」とか「昨日の学習発表会の練習での武司の態度はひどかった」とか書かれていた。今なら個人情報満載で目の見ないだろう。こんなこと、うちのクラスにいる人間ならみんな知っている、わざわざプリントにする必要はないだろうに……と子ども心に不思議に思ったものだった。そして、ほとんどは紙飛行機になっていたのも事実だ。当時の学級通信とは、担任の自己満足のためのもの、というイメージがあった。出さなくて……(も)(いい)(もの)……だった……。

その点、今の学級通信は毎週必ず出さなければならない。なぜか？それは、時間割が毎週同じではないからだ。一年間の授業時数が変わり、なんと毎週同じ時間割ではその授業時数をクリアできないからだ。「ナナメ掛け」と呼ばれ、月曜日の3時間目は、今週は社会、来週は音楽、というように流動的になってしまった。とんでもない話である。おかげで、忘れ物率は飛躍的にUPした。当たり前だろう。俺が子どもの頃なんて、時間割を見た記憶はない。

俺のクラスの学級通信「上を向いて歩こう」の表面には教室であった出来事を書き、無記名というのがポイントだ。前に、記名して子どものいいことを褒めていたら、「どうしてうちの子の名前が出ないんですか？ひいきじゃありませんか？」

と、電話をもらった。もちろん、ひいきではなく、うちの子である翔太、が良いことをほぼ、全くしなかったからだった。次の日、隣

の子の消しゴムを無理やり拾わせて、「優しい翔太君、消しゴムを拾う」と書いたら、個人懇談で、

「あんな厭味つたらしいことを載せなくてもいいんじゃないですか？」

と怒られた。幸い、それ以来苦情はなかったが、どうしろっていうんだ！と叫びたくなって、その夜にいつも飲まないビールを立て続けにあおったことを覚えている。

昨日あった出来事を書く。給食をこぼしたことで、みんなで片づけたことを、サラサラと書いていく。さも、素敵な事だったように書くことも得意になってきた。裏面には、来週の時間割を書き入れる。ふと、時計を見る。七時半を回っていた。その間に、同僚たちも少しずつ出勤をする。顔をあげずに、おはようございまーす！と声を上げる。大きな声で挨拶、子どもにも話していることは実践しているつもりだった。

「金子さん、こないだの生活の実態アンケートの集計いつだったけ？」

「あ、おはようございます。あれは、確か今週中だったと思うよ」

「うえ、今週中！まずいなあ、やる暇ないなあ…了解。わかりました」

と声をかけてきたのは、隣の席の4年生担任、早見光教諭だった。サッカー場に今から立つのですか？という格好で職員室に現れる。俺よりも三つほど若い男で、バリバリのサッカー大好きな男。うちの学校のサッカー少年団を受け持っている。

「早いうちにやっておいた方がいいよ。教頭、なんか機嫌悪そうだったから」

「いや、わかつてはいるんすけどね。今週末、うちのサッカー大会があるから、そんなのやってる暇はないんすよね。めんどくさいなあ」

「めんどくさがるなよ。サッカーは仕事じゃないだろ？」

「ま、そうっすね。俺の好きでやっていることだから」

と早見は面倒くさそうに言うなり、机にあったヘアワックスを持つ

と職員室を出て行った。自分の家でしてこいよ！と怒鳴りつけたくもなるのを抑える。たぶん、トイレで髪の毛をセットしてくるのだろう。

早見は、サッカー少年団を受け持っている。放課後に子どもを集めてサッカーを教えるのだが、小学校には部活がない。なので、完全なボランテニアということになる。お金をもらわないでサッカーを教える、聞こえはいいがその分本務に支障をきたすこともある。サッカーの練習は毎日、土日も欠かさず練習を行う。一生懸命といえば一生懸命だが。

「本来の仕事に一生懸命になれよ！」
と何度も酒の席で説教したこともあるが、本人は全く応えない。念仏を唱えているわけではないが、馬の方が少しは覚えてくれるんじゃないか？と思うほどだ。

学級通信を印刷して、教室に向かう。時間は八時十五分前。八時一五分までに児童は登校を終えなくてはならないので、パラパラと玄関に子ども達が集まっていた。

「おはようございます」

「あ、金子先生おはようございます」

子ども相手とは言え、丁寧な言葉を使うようにしている。丁寧な言葉づかいを子どもに求めるなら、自分が丁寧な言葉遣いをしてやればよい。「おはよー」とフランクに声をかければ、「おはよー」と返ってくるのは当たり前だ。

自分の教室に行くと、子どもの姿はまだなかった。自分のクラスの子どもの達の大体の登校時間は把握している。一番早く来るのは、児島蓮太で八時五分くらいに来る。

誰もいない教室で、頬をパンパンと打つ。そして、「ヨッシャ」と気合を入れる。この学校に来てから毎朝やっている儀式のようなものだった。毎日が戦いのようなものである。そして、俺は毎日の戦いに勝利している。保護者からのクレームもなければ、子ども達も俺に慕っているのがわかる。そう、俺は「できる教師」なのだ。

ピンポンパンポーン

「金子先生、金子先生、お電話が入っています。職員室までお戻りください」

その放送はいつもと変わらない放送だったのだが、なんとなく俺は嫌なものを感じた。子ども達に文句を言われないうつ、早足で廊下を進んで職員室に入る。

後に考えると、その電話が始まりだったようにも思う。その電話が順風満帆だった毎日の生活にヒビを入れるものであり、一度ヒビが入った毎日は案外もろいものでガラガラと崩れていく。そんなことすらわからなかった俺は、やはり未熟だったのだと思う。「できる教師」なんて、この世に存在しないことに気づくのは、この時よりもっともっと後のことである。

金子正一の話 2

「おはようございます。お電話変わりました、金子です。いつもお世話になっております」

「おはようございます。柏木です」

「どうされました？」

「いや、どうもこうもないんですけど」

「はあ」

「うちの雅彦がね、学校行きたくないって言ってるんですよ」

「え！本当ですか？雅彦さんが…」

「なんか、今日なんかは、ちよつと鼻もぐずぐずしているから、様子を見るために休ませようかと思っっているんですけどね」

「なんで雅彦さんは学校に行きたくないって言っているんですか？」

「みんなが僕の言うことを聞いてくれないって言っているんです。

誰もわかってくれないんだって。もしかして、うちの子、いじめられてるんじゃないですか？」

「いや、いじめられているというよりは…なんというか、イマイチ話が進まずと会わないところもありますよね」

「だから、それがみんなからはずされているってことじゃないんですか？」

「はずされているっていうのとも、またちよつと違うと思うのですが…」

「雅彦が話しかけても、周りのみんなはちゃんと話聞いてくれないで、僕はいつも一人ぼっちなんだって。休み時間とかも、僕がドッジボールが苦手なのわかってドッジボールやろう、とか言っつて言っているんですけど」

「それは、みんなそれぞれやりたい遊びもありますし」

「とりあえず金子先生から見て、いじめられてはいないんですね？」

「いや、ないと自分では思っているのですが…」

「どつちなんですか？自分のクラスなんだからわかるはずじゃないですか？」

「ないと、思います」

「絶対ですね。これで調べていじめがあったら、校長に言うだけじゃすみませんからね」

「話は子ども達に聞いてみますから。特に誰とうまくいかないって、雅彦さんは言っているんですか？」

「誰ってこともありません。みんなって言ってます。みんな」

「みんなって言われましても…クラスみんながいじめをしているって言っているんですか？」

「だからそうだって言っているじゃないですか！もういいです。とりあえず、今日は様子を見ます」

「あ、放課後、また時間がある時お電話してもいいですか？」

「はい。それでは」
ガチャン、ツーツー

受話器を戻しながら、とうとう来たか…と胸が苦しくなった。電話中は頭の中が真っ白で、深く考えることができなかった。もうちょつとどうにかできなかつただろうか？少なくともこういう状態で電話を切ることにならない対応はなかつただろうか…？

ふらふらした状態で自分の椅子に座る。雅彦か…確かに言っていることは思い当たる。雅彦の話は五年生にしてはポケモンの話題ばかりで、周囲には受け入れられていない。そして、舌つたらずな話し方で語彙も少ない。仲間外れ、とは言わないが、みんなそれぞれ少し距離を置いているのは事実だ。それをピンポイントで指摘されては返答に困る。

その時、教頭と畠中が校長室から出てくるところが見えた。

基本は「ほうれんそう」の「報告・連絡・相談」だ。しかし、自分で解決して何事もないように振る舞うという選択肢もあるか…自分の中の都合のいい考えが誘惑をしてくるが、正直に話した方が被

害が少ないことも経験からわかっていた。どうする…？

迷ったが、今すぐ報告するのはタイミングが悪すぎる。畠中先生の辞表話の後、期待していた若手教師からいじめの相談なんてされたら、ただでさえ薄い髪がハラハラと落ちて行ってしまっただろう。胃も悪いと聞いている。今は話すべきではない、そう決断した。

決断すると、気が楽になった。都合が悪くなる前に教室に避難することしよう。教室で子どもの対応をしていた、という話にすれば、何かあった時に対応できるだろう。

自分の身を守る術は、この五年間で学んだつもりだ。今回も乗り切れると思う。大丈夫だ。

教室に向かう時、畠中先生の方をチラッと見た。女の子が教室でケンカが起きていると言っている。教頭の顔が曇るのが見えた。当分報告するのは遅くなりそうだ。

畠中良子の話

校長室を出ると、金子先生が青ざめた顔をして受話器を握っているのが見えた。あれは多分クレームだろう。なんとなくわかる。私にもよく来る電話だから。

校長室での話には参った。辞表を出しているのに、どうしてやめさせてくれないのだろうか？ここは民主主義国家ではないのだろうか？教育公務員は全体の奉仕者であり、私自身の幸せや心の平穩はもらえない、ということだろうか？

浜田教頭の話もよくわからない。昨日あれだけ、

「畠中先生の学級経営は経営になってないんだよ」

「子どもの身の回りや生活習慣は担任の生活習慣の鏡なんだ。だから、子どもに言う前に畠中先生の机をちゃんと片づけなさい」と

「指示を徹底してください。良い姿勢を取らせるなら、確実に全員取らせないと！一年生なんて、学習習慣を身に付けさせるのが大前提」

とかなんとかネチネチ私をいじめておいて。あんなの私が嫌いだから、この学校から追い出したいに決まってる。私は言われなくてもちゃんとやっている。ちゃんとやってくれないのは、今年の一年生の質が悪いから。前の一年生は、今と同じようにやってもちゃんと動いてくれた。だから、私の学級経営は間違っていない。子どもが悪いと思う。

そして何より親が悪いと思う。ちよつとのケンカですぐに学校に電話が来る。

「畠中先生、どうしてうちの子が悪くないのに、うちの子が謝らなきゃならないんですか！うちの子が言っていましたよ。健太君から何もしていないのに殴ってきたって！そりゃ、うちの子もやり返したかもしれないけど、始まりは健太君ならうちの子は被害者です。もうちよつとちゃんと指導してくれなきゃ困ります」

「ちょっと、うちの子繰り上がりの足し算ちゃんできないんですけど。宿題とかもうちよつと出してもらってもいいですか？このままだったらこの先不安です。学校で何を教えているんですか？」

なんて電話は日常茶飯事だし、私も、

「申し訳ありません」

とは言っけど、本心から言っている訳ではない。だって、私の指導というよりは、そういう電話をかけてくる家庭の指導が悪いからそうなるのだから。ちゃんとやっている子は、私の指導についてくるし、家庭からの文句もない。人のせいにするからなんでもかんでもできなくなると思う。私の学級経営は悪くない。悪いのは、子どもであって、親だと思う。

職員室の席に戻ってPCを立ち上げる。壁紙は韓国の人気スター、パク・チヨビンだ。子どもの相手なんかしているより、チヨビンの顔を見ている方がよっぽど心は休まる。

「畠中せんせい、けんた君とかい君がまたケンカしてるよ」

見ると、横にクラスの女の子のレミが来ていた。ちよつと怒った顔をしている。それも私のせいだっていうの？

「わかったわよ。今行くから待つてなさい」

今日もまた楽しくもない一日が始まる。早く帰って、「春のオペレッタ」のドラマのDVD見たいわ。チヨビンに早く会いたい。

学校の先生なんて、やってられない仕事だと思う。そのやってられない仕事なんて辞めたい。辞めて何があるのかなんてわからないし、不安ばかりだけど。

仕事を辞めたいのかな？それともこの人生から降りたいのかな？わからなくなってくる。

「せんせい、早く行かなくちゃ！」

とレミが引つ張る。よれてくたくたになったTシャツが伸びるが、構いやしない。どうせ、学校と家の往復しかないのだから。恋人と呼べる男どころか、声をかけられたことすらない。生涯処女を貫き通すことにもなるだろう。不本意ながら。

とてとてと、先を歩くレミの後姿についていく。「レミ」「とカタカナでつけられた名前に負けない子に育っていくのだろうか？私のように「良い子」という名前を付けられて、「どつでもよい」「なってしまうのだろうか？」

それは、私の指導どつこつではないだろうな、となんとなく思いながら廊下を走った。

早見 光の話

畠中がバタバタと職員室から出て行った。五〇近くなってバタバタ廊下を走るなよ。見苦しいな。

畠中は悪いけど人間として終わってると思う。ボサボサの髪の毛は頭頂部がもう薄くなってるし、体も鏡餅みたいになっている。その上、ピチピチしたよれたTシャツを着ているのだから、目のやり場に困る。人生をあきらめちゃってるんだろなあ、とかわいそうにも思うが、逆に何で直さないんだろ？と不思議にも思う。

時計を見ると後十分ほどで職員朝会が始まる。一日の朝の会はクラスの中だけではない。学校の先生方の中でも同じように行われる。少しでも1時間目の国語の時間に困らないように教科書を眺めることにした。

授業の準備はしたいしたい！とは思っているが、正直準備をする時間はない。なんてことはない、毎日放課後にサッカー少年団の指導があるからだ。

俺の四年生は毎日六時間授業なので、三時半過ぎに下校になる。その後、学校のグラウンドでサッカーをやりたい子ども達を集め、夜は暗くなるまで練習を行う。今は夏真っ盛りなので七時半過ぎまで練習ができる。そうすると、職員室に戻ってくるのは八時頃。八時半には教頭が学校を閉めるので、自然と次の日の授業の準備なんてする時間なんてなくなる。家に帰れば飯を食って寝るだけの日々だった。

この少年団というのは、はっきり言ってよくわからないシステムだ。地域の少年団なので先生がやらなきゃならないことはないのだが、俺は間違いなくサッカーの指導をするためにこの学校に配属された。小中高大とサッカーをやってきた俺は、採用試験の面接の時に、

「今までやってきたサッカーを生かし、教えることで、これからの

時代を担う子ども達にグローバルな視点を与えたいと思っています！サッカーは声なきコミュニケーションシヨントールです。世界で一番競技人口が多いと呼ばれるサッカーは、たとえ言葉が通用しなくても世界の人々と繋がるうー！という気持ちを養ってくれます。だからこそ、私はサッカーの指導を学校教育の中で生かしたいのです！」

などといったものだから、このようなサッカーの盛んな少年団のある学校に勤務することになった、

この少年団、完全なボランティアで土日も休まず練習をするにも関わらず、給料は出ない。その上、下手なことをすると容赦なく保護者達からクレームが来る。この間なんか、体格の大きい子をキーパーに起用したら、

「先生、うちの子が太っているからってキーパーにするのやめてください！」

と電話が来て困ってしまった。たぶん、FWにして試合に出さなきゃ出さないでまた電話が来るのだろう。どうすれっていつのかわかったもんじゃない。

でも、俺は少年団の指導に文句はない。それで教員採用試験を受からせてもらったことは一目瞭然だから。サッカーに携わっているのは楽しいと思うし、何より勉強なんかよりサッカーの方が楽しいに決まっている。そう思うのは俺だけじゃなく、子どももそうに決まっているはずだ。

八時二十分になって、職員室にバタバタと先生方が戻ってくる。今日の日直は2年生担任の佐藤真理先生だ。ショートカットが似合うが、ガツガツしすぎていて俺は苦手だ。

「それでは、八月二十九日木曜日、職員朝会を始めます。みなさんおはようございます」

おはようございます、とボソボソとつぶやく。あほくさ。

「今日の日程は板書の通りとなっております。板書事項に関して、何かありますでしょうか？はい、岡部先生」

「はい、今日は札幌の方で国語の研修会に出席してきます。六年生

の補欠には林先生が入ってくださいます。何かと迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします」

六年生の担任、岡部博文先生が話した。40代半ばのミドルエイジというポジションについている先生だ。俺も含めてみんな頭が上がない。岡部先生の言うことは校長の言う言葉よりも説得力があり、絶対だった。

「他にありますか？なければ、学校長からの一言です」

と佐藤先生が松永校長に話を振ると、眠たそうな目を光らせて話し始めた。

「えー、夏休みが終わり、子ども達も少しずつ学校のペースに慣れてきました。でも、ここからが正念場です。それぞれの先生方、頼みましたよ」

と言うと、また目を細めてしまった。松永校長のイメージはキツネだった。普段から眠そうな目をしてこっちの油断を誘っておいて、一気にのど元にとびかかってくる。口元は笑っていても目は笑っていないことも多い。おっかない人だった。

「それでは、職員朝会終わります。今日も一日、よろしく願います」

お願いします！とみんなが言って職員朝会は終わった。なんで黒板に書いていることを読み上げて、それに対して同じように発言しなきゃならないんだか、子どもと同じかよ！と腹立たしく思う。

学校の先生になって二年目、去年から「先生」という職業に嫌悪感すら持つようになった。飯を食べに行つて職業を聞かれた時には、「公務員です」と名乗るようにしているのも、「先生」という言葉の響きが気に食わないからだ。先に生まれているから偉い！と思っている人間の多いこと多いこと。俺はそうなりたくないと思日頃から思っている。

朝会が終わると、みんなそれぞれ教室に向かう。俺にとって至福の時間がやってくる。職員室で同僚と顔を突き合わせているより、子どもとじゃれていた方が楽しい。そもそも、子どもが好きだから

この仕事についたのだ。なぜ、教室に向かう教師の顔はみんな曇っているのか不思議でしようがない。

もちろん嫌いな子どももいるが、そういう奴は無視しとけばいいのだ。親はうるさいが、クレームが来ても死ぬわけではない。そもそも、俺が悪いというよりは、クレームをしてくる子どもの方が圧倒的に悪いことが多い。気にすることはない。

さて、今日も一日楽しんでいこう。

二時間目の授業の終わりのチャイムが鳴った。これから二十分間の中休みが始まる。子ども達は一斉に廊下に駆け出していく。グラウンドのサッカーゴールを取るのに毎日熱中しているのだ。いつもなら俺も一緒に混ざって遊ぶところだけど、今日はそうはいかない。柏木は体調が悪いので今日は欠席、という話を朝して事なきを得たが、今日のプリントなどを他の児童に持って行ってもらわなくてはならない。その人選も考えなくては。

しかし、何よりもまず、今朝の電話の一件を管理職に報告しなくてはならない。こういう問題は熱いうちに叩くのが鉄則だと思っている。時間が経てば経つほどこじれるのは、同僚を見てきて学んでいるつもりだ。また、正直に話した方がチームで対処できる。個人に責任がふっかけられることも少ない。その為の管理職なのだ。利用しない手はない。

しかし、柏木がいじめられている、という認識は俺自身なかった。確かに少し浮いている、という感覚はあったが、それをいじめとは認識していなかった。今の時代のいじめの定義は文科省からしつかりと打ち出されている。文科省では、「当該児童生徒が、一定の間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」とある。これは要約すると、「私はいじめられている」と言えば、それは「いじめ」となるということだ。だから、今回の柏木のケースも定義から言うと、「いじめ」となる。

この定義では、「いじめる奴が悪い」となるが、いじめていた側もこの報告を受けて、「いじめていないのに、いじめていると言われて、いじめられた」と言えばそれは「いじめ」となる。こうなったら水掛け論だ。言ったもの勝ちの世界である。それを国が打ち出しているのだから、とんでもない話だ。

職員室に戻ると、教頭は眉間にしわを寄せてパソコンとにらめっこしていた。老眼が入ってきているのか、画面に近づかないと字が追えないらしい。教頭の事務仕事の量は膨大だ。休み時間と言え、休憩時間ではないのだ。

「あの、教頭先生……」

「なんですか？金子先生」

「うーん、確実に機嫌は悪そうだ。しかし、もうこれ以上引き延ばすことはできない。」

「ええと、ですね……少し相談が……」

「……はい、なんでしよう？」

教頭の眉間のしわが深くなったような気がした。

「ええと、今朝、うちのクラスの柏木さんから電話がありました……」

「柏木……えつと、今日は体調が悪くて欠席している子ですね。何かありましたか？」

欠席児童は黒板で一目でわかるようになっていた。体調不良、と書いていたのだった。

「実は、体調不良という訳ではなく……お母さんから電話があつて、『いじめられているから、学校に行きたくない』という話があつたんです……」

話している最中から顔を見ることができなかつた。仕方がないので眉間の辺りを見ていたが、話し終わった段階で頭皮がみるみる赤くなっていくのがわかつた。怒ると人間つて、赤くなるんだなあ……とぼんやり思った。いや、思ってしまった。

「金子先生、どうしてそういうことは朝から言わないんだ！すぐに報告するべきだろう！」

「いえ、子ども達の対応に追われていまして……授業も始まつてしまつたものですから、報告が遅れてしまいました」

「言い訳するなっ！」

つばしぶきが顔にかかる。仕方がない、ここは甘んじて受けなくてはならない時だ。職員室にいた同僚の動きが一瞬止まつて、腫物

には触らないように動き出す。自分で何とかするしかない。

「すいませんでした。教頭先生、どのように対応していったらいいでしょう?」

「どのように対応したらいいでしょうか?ではなくて、どのように対応するべきか考えろ!」

しまった。言葉を間違えた。「失敗したときは、改善策を用意してから報告しろ」という教えを守らなかった。すぐに、言葉を選んで話すことにする。

「今朝の柏木さんの話では、雅彦さんは学校でいじめられているから学校に行きたくない、と言っているそうです。具体的には、自分のしたい遊びをやってもらえないという感じの事を言っていました。確かに少し周囲となじんでいないところはあります。しかし、私自身としてはそれをいじめと認識していませんでした。なので、今日の授業が終わったらすぐに本人と話して、事情を聴いてみようと思っています。繰り返しますが、周囲の児童が目立っていじめられているという様子は、私の見ているところではありませんでした。放課後の様子などはわかりませんが、そのような話を聞いたこともありません。雅彦さん自身に変わっているところがあるのは事実ですが、それをいじめと考えるのは少し安直な気もします」

一気にまくしたてた。浜田教頭は、大きなため息をついてギロリと音が出そうな感じでこっちを睨みつけて言った。

「とりあえず、話を聞かないことには話にならない。放課後では遅いと思うが、もう仕方がない。そうしなさい。その後、すぐに報告するように」

「わかりました。報告、遅れてすみませんでした」

「気をつけなさい。何だって今日はいろいろあるんだ…」

キーンコーンカーンコーン

予鈴が鳴ったので、そこで話は終わった。次の授業は社会か…俺は教室に向かうことにした。教室までの廊下で、六年生担任の岡部先生と一緒に、声をかけてきた。

「大変だなあ。雅彦いじめられてたつてか？」

「はい…いじめられてるっていうよりは、ちょっと避けられているというか、浮いているというか…特別危害を与えている訳でもないし、無視をされている訳でもないと思うのですが…」

「そうだなあ。俺も雅彦とは委員会とかで一緒になっっているから、なんとなくそういう雰囲気はよくわかるな」

「ですよね…ちょっと変わっているというか…」

「そうだな。周りの子とうまくなじんでない様子はあるな。空回りするというか。それはそうと、さっきの話を聞いてたけど、今日の対応はまずかったな」

「そうですね。報告が遅れちゃったのはまずかったです。でも、朝はバタバタしていたので…」

「本当なら朝電話を受けた段階ですぐに報告するべきだ。そして、授業の補欠に入ってもらい、すぐに家庭訪問をすることの方がベターだったと思うぞ。保護者ってのは、電話をかけてくる段階で、かなりの学校に対しての不信感を持っている。電話がかかってきた段階で、警戒をしなきゃならないんだ。電話がかかってきた時に俺らがしなきゃならないことがあるんだが、なんだかわかるか？」

岡部先生は教頭と違って、真つ向から否定することをしない。相談しやすい人つてこういう感じなのだろう。子ども達からの信頼を得ていることもうなずける。

「うーん、精一杯謝ることですかね？」

俺は自分なりの答えを用意した。岡部先生と話すと、教頭と話すと、きよりも緊張する。教師としての資質を問われているような気がするのだ。

答えを聞きたいところだったが、教室についてしまった。岡部先生は足を止めて言った。

「謝るのはもちろんそうだが、一番必要なことは、『すぐに動くこと』だよ。結局行動で示すしかないんだ。だからこそ、今日の放課後、しっかりと話を聞いてこなきゃならないよ」

そういうと、岡部先生は六年生の教室に入っていた。確かにそうだなあ…と一人納得してしまうとともに、浅はかな返答してしまった自分が恥ずかしくなった。

俺は、いつになったら、ああゆう教師になれるんだろうか？

岡部博文の話

三時間面の授業は算数だった。六年生では、分数の割り算の学習をしている。分数の割り算のやり方、分子と分母をひっくりかえしてかける、ということを知っている人間はたくさんいると思うが、その理由を説明できる人間は一握りだと思う。いつだったかニユースで分数の割り算ができない大学生がいるというものがあつたが、なんとなく覚えて、使わなければできなくなるのも当り前だろう。「じゃあ、今日の授業の課題は『分数の割り算のやり方を考えよう』だね」

黒板に板書すると、子ども達が一斉にノートに鉛筆を走らせる。このクラスの子ども達は学習意欲が高い。北海道の片田舎で進学率が高いわけでもない。家庭の教育力が高いわけでもないが、子ども達は学ぶことを楽しく思っている。それはそうなるだろう。俺自身も子どもの頃、今やっているような授業を受けることができたなら、もっと勉強していただろうなと思うほどだから。

授業の最初に課題が出される。その課題を解決するために自分で考える。算数の基本は「既習事項を生かす」ことだ。課題は今まで習ったことを使いこなせば解くことができる。RPGなんかと似ているだろうか。一つ一つ確実にできることを増やしていくことで、新しい敵を倒すこともできる。

しかし、自分一人で課題を解くことができない時もある。そのためクラスで考える。友人の力を借りる。みんなで解き明かす。そこに優越感や劣等感は生まれない。なぜなら、活躍できる人間はその都度変わるからだ。塾やドリルで予習している子もいないわけではないが、その解き方を説明したり、クラス全体でわかってもらったりするには人と人との関わりが必要になる。それは自分一人の予習、または塾での教え込みの学習では身につかない。「みんなができること」を目標とする授業を構築する。それが難しく、また楽しい。

一人目の子どもが口火を切った。

「1/2に分けるって考えがおかしくなりませんか？」

「どういんですか？」

「一枚のピザがあつて、それを二人に分けたり、一人に分けたりつてできるけど、1/2人に分けることつてできないじゃん」

「確かにそうだ」

「だからさ、1/2に分けるって考えをやめちゃえばいいんだよ」

「じゃあ割り算ではできないってこと？」

子ども達の頭に「？」マークが浮かぶ。ここからどう動くだろうか？俺の説明を入れなければ、進まなくなるだろうか？

俺は、スツと教室の横に掲示してあつた割り算の言葉の式の近くに動いた。割り算の言葉の式は二つある。

「全体量÷一つぶん＝いくつぶん」

「全体量÷いくつぶん＝一つぶん」

と書かれている。子どもの一人の顔がパアッと明るくなり、大きな声で話し始める。

「わかった！ねえねえ、割り算って二つなかつたっけ？」

「『いくつぶん』を出すやつと『一つぶん』を出すやつだよ」

「たとえばさ、2mで300円のテープの1mぶんの値段なら、300÷2になるじゃん」

「うんうん」

「同じように1/2mで300円のテープの値段を出すなら、300÷1/2になるってこと」

「うん？あー、わかつたわかつたー！」

子ども達の顔がどんどん明るくなっていく。しかし、その中で一人首をかしている子が発言した。

「えー、それなら300×2の方がわかりやすくない？だって、600円でしょ？」

「いや、そうなんだけど。とりあえず、分数の割り算ってのはでき

るってことはわかったじゃん」

「えー、でも、わざわざ割り算でやることないじゃん。掛け算の方が簡単なのに」

子ども達同士の話し合いが白熱してきたが、そこまで話が進んだところでちょうどいい時間になった。俺は話に合わせてわかりやすいように板書をしただけだった。

「じゃあ、 $300 \div 1 / 2 = 600$ ってのはわかったね。次の時間は、どうして $300 \div 1 / 2 = 600$ になるのかを考えよう」

子ども達は目を輝かせながら、うんうんとうなずいている。この授業も楽しかった。

「せんせー、さようならー」

「はい、気をつけて帰りなさい。また明日ね」

と笑顔で返したものの、気分はすぐれなかった。もうすぐ、柏木さんに電話をかけなくてはならない時間になる。保護者対応には慣れしてきたつもりではあるが、明らかに怒っている保護者と話すのはやはり緊張する。こじれたらそこまで。話は雪だるま式に大きくなり、手をつけられなくなる。

放課後、誰もいなくなった教室でノートを開く。窓の外に見えるグラウンドでは、サッカー少年団の子ども達が集まってきている。そろそろ少年団の活動も始まる時間だ。仕事ではなく、地域の住人として指導している少年団の指導は勤務時間である四時から始まる。早見が嬉々として指導に当たっているが、俺には理解ができない。教師としての仕事をなんだと思っっているのだろうか……

そこまで考えたところで、頭を振った。現実から逃れようといういると他の事を考えだす。こうなっただけの問題がうまく解決したためしがない。今は、柏木さんに電話をかけた時のシナリオを考えるのが先だ。

開いたノートの中央に、「柏木さんに？」と大きく書いて丸で囲む。マインドマップの要領で、気づくことを書きだして線でつなげていく。

「学校には行きたくない？」
なぜ？

「いじめられているから？」
いじめとは？

「みんなと馴染めず、浮いている」
なぜ浮くのだろうか？

「話題が合わない」

なぜ話題が合わないのか？

…ここまで書いたところでふと手が止まる。なぜ、雅彦は周囲と話題が合わないのだろうか？実際に幼い雰囲気がある雅彦だが、学力は低くない。むしろ高いと言ってもいい。それなのになぜ幼いのだろうか？ここは、実際に家庭での話を聞かなければならない。この部分には赤線を引いた。そして、マインドマップの作成に戻る。

「学校に求めること」

何を？と考えた時に、岡部先生の言葉が脳裏に浮かぶ。

「真摯な姿勢、対応」

…いや、違う。学校に求めることは、あくまで違う。誠実な姿勢を見せれば納得する訳ではないと思う。

「雅彦が学校に来れるようになること」

これが一番求めていることだ。そのために、俺自身も含めて何ができるか考えるべきだ。

どうやったら学校に来れるのか？

「浮かなければいい」

それは現段階では無理なように思う。

「浮いても大丈夫になればよい」

どうやって？

「子ども同士の関わりだけではなく、教師との関わり」

それだけでいいのか？

「好きな教科ややりたいことがあればよい」

…ここまで書いて、教師の真摯な姿勢や対応がやはり必要なことに気が付いた。いじめられている、という根本的な解決はもちろんのことだが、当面まずは学校に来させるために必要なことは、教師がなんとかできる部分が大きいようだ。

整理すると、

？ まず、雅彦が周囲と馴染まない理由を探っていく

？ 当面、学校に来させるために、学校の中での楽しいことを探る。

？ 雅彦が学校に来た時に教師のサポートを忘れない。

こんなところだろうか。とりあえず、お母さんだけではなく雅彦本人と話をしなければどうにもならない。

ふと、窓の外を見ると、早見が大声を出しながらサッカーの指導をしていた。

「だから、そこで足を止めたらどうしようもないだろ！てめえ一人でやってるんじゃないんだからよ！考えろよ！」

およそ教師とは思えないような言葉で指導に当たっている。チラホラと保護者の方から苦情も来ていると聞く。しかし、これは「先生」としてではなく、「一住民」として指導に当たっているのだから、こんな時だけ「先生」扱いされても困る、と早見は全く気にしていない様子だった。今回の雅彦の一件も、早見だったら、

「だって、浮いちゃうのは本人の問題じゃないすか？俺が外している訳じゃないから、そんなこと言われても困りますよ」

とヘラヘラして終わらせてしまふ気もする。そうじゃないだろ！とも思うが、うらやましいとも思う。それくらい楽観的に考えることができれば、教師なんて楽な仕事は他にないとも思う。

俺は大きなため息をつき、教室の整理を終えた。いよいよ、柏木さんに電話をかけなくてはならない。重い足取りで職員室に向かった。

電話

「もしもし」

「こんにちは。北星小学校の金子と申します」

「はい」

「えー、どうでしょう？一日様子を見られて」

「どうもこうも。家で落ち込んでいましたよ」

「そうですね」

「それで、先生の方は学校で何かしてくれましたか？」

「いえ…特に何か行動に移したという訳ではありません」

「なんですって！うちの子がいじめられて学校を休んだっていうのに、何もしなかったってこと！…どういうこと！」

「いや、とりあえず、雅彦さんの様子をもう少し見てから具体的な行動に移そうかと思っていました」

「それって遅すぎじゃありませんか？うちの子は、もう学校を休んでるんですよ！その間の勉強だって遅れるし。先生は責任とってくれるんですか？」

「いや、責任と言われましても…その間の学習については、僕がついて確実に教えますから」

「それって、明日も学校に来なくていいってこと？ふざけないですよ！すぐになんとかしなさいよ！」

「ですので、まずは雅彦さんの話を聞いたりしてみないと…」

「だから、うちの子はいじめられているって言うているでしょ！だからいじめている子を探し出して、謝らせに来るのが普通でしょ！」

「誰にいじめられているっていう話は出てきたんですか？」

「そんな話はしてないけど、誰かがいじめてるに決まってるんだから！多分、どうせ、あの悪ガキの加藤君とかが、みんなに声をかけていじめさせてるに決まってるわ」

「そうやって雅彦さんが言ってたのですか？」

「だから、そうじゃないけど、そうに決まってるって言っているのよ！もう、あんたじゃらちがあかないわ」

「すみません、とりあえず雅彦さんと話をさせてもらいませんか？」

「今、雅彦と話したってどうせ『いじめなんてなかったんだろ！』

って丸め込むんでしょ？今は雅彦とは話をさせる訳にはいかないわ」

「…そう言われましても、今の現状がつかめないまま、クラスで『雅彦さんをいじめている人？』と聞いても、クラスのみんなはピンと来ないと思いますよ」

「じゃあ、どうしてうちの子は学校を休まなきゃならなかったのよ。そうやってなんだかんだって言い訳しながら、結局いじめの事実ってのを隠したいだけなんでしょ？」

「いや、隠したいという訳ではないのですが、実際にどういう状況なのかを本人と話をしないわけには」

「何回言わせるのよ！雅彦はいじめられているって話をしているじゃない！本人がいじめられているって話をしてるんだから、雅彦はいじめられているのよ！それはもう、疑いない事実なのよ！」

「ですから、こっちも何度も話しているように、それを詳しく雅彦さんと話をしたいと言っているんです。雅彦さんがどう感じているか、何を苦しく思っているのか、その辺りを担任としては聞いてみないと、対応もできません」

「何？私が話のわからない女だっけ言いたいの？」

「いえいえいえ、そんな話ではなくて…」

「ふざけないでちょうだい！雅彦のいじめを解決しないで隠そうとしただけではなく、私のことまでバカにするっていうの！そんな担任だもの、いじめが起きていても知らんぷりするのね」

「いえ、お母さんのことを悪く言っているのではなく…」

「もういいって言ってるじゃない！もういいわ。校長先生と変わらなさいよ」

「ですから、そうじゃなくて…」

「何、校長先生に変わる気もないの！もう本当に頭に来たわ」「い

えいえ、今すぐ変わりますよ」

「もういいわ、覚悟しておきなさいよ」

「あっ、ちよっと待っ……」

早見光の話2

サッカーを終えて職員室に戻ると八時近かった。七時まで活動をして、その後片づけ。うちの学校にはナイター設備がないので、夏はできる限りやっている。北国でもこの季節は七時頃までボールは見える。

片づけを終えると、迎えに来た保護者などと立ち話になる。レギユラーはどうなるか？今年のうちのメンバーはどうか？そんな話をダラダラとして学校に戻るとこの時間。この時間から、明日の準備が始まる。毎日のサイクルがこうなので、あつという間に慣れてしまった。一人暮らしだから、気兼ねすることもなく学校に残ることができる。税金だから学校の電気がもつたいたい、と金子先生に言われたこともあるが、じゃあお前がサッカー教えるよ！と心に中で思った。サッカーを教えるのは、俺にとっては仕事だ。

職員室に戻ると、職員室には誰もいなかった。いつも教頭が必ずいるのにめずらしい。ふと見ると、校長室の電気がついている。この時間に校長がいることはめずらしい。いつも開いている校長室の扉が閉まっているのも含め、何かあつたなと思った。

職員室を眺めると、金子先生の力バンがある。金子先生は、いつも六時頃には帰る人だから、たぶんあの中にいるのは金子先生だろう。何かあつたんだらう？

畠中とかなら何かあつたのは想像できる。でも、トラブルなんかなさそうな金子先生が何をやらかしたんだらう？ま、けどちょっと笑える。ざまあ、って感じた。いつもいつも、上から目線で偉そうなこと言っているからな。でも、大したことないじゃん。

冷蔵庫からお茶を取り出し、ゴクゴクと飲み干しているところで校長室の扉が開いた。

明らかに青白い顔をした金子先生、逆に真っ赤な顔をした教頭、そしていつもと変わらない校長が出てきた。教頭に毎日と同じよう

に報告をする。報告をしなかつただけで怒鳴られたことがある。ついでに何があつたか聞いてみよう。

「あ、少年団終わりました。ってか、なんかあつたんすか？金子先生が何かやらかしちゃつたとか？」

金子先生は、青白い顔をより青くした感じで口を開いた。ちよつと涙目になつてるところが笑える。

「いやさ、クラスでいじめだつて電話が来て。柏木雅彦、今日学校休んだんだ。お母さんとの電話で、ちよつとね」

睨みつける教頭を横目に、校長がフォローを入れた。

「いや、ちよつとした誤解なんですよ。金子先生ともこれからどうしていこうか相談もしましたし。なんとかかりますよ」

「そうでしょうか？電話の様子を聞いてたら、柏木さん、委員会にも言いかねませんよ」

教頭が口をとがらせながら言った。どうやら、結構大変なことになるっているらしい。ま、どちらにしても俺にはそんなに関係ないことだ。

「いやー、金子先生、大変つすねー。どうすか？一杯飲みにもいいときですか？パーツと」

「いや、悪いけど…明日の準備もできてないから、今日は帰るわ。ごめんね」

と金子先生は、うなだれながら言った。大きな黒縁メガネに長髪のパーマ、うなだれるとちよつとした妖怪のように見える。やっぱり笑える。

「そうすか、んじゃ、元氣出してくださいね」

と軽く言っておくが、正直言つともつとでかいことになるといいなと思つている。だつて、教育委員会とか絡んでもつとでかい話になつたら楽しそうじゃん。

教師になつて二年ちよつとだけけど、学んだことがあると思つ。それは、「頑張りすぎないこと」だ。教師つて言つたつて、ただの人間だし。昨日まで大学生だつた人間を、子供だけじゃなく、大人も

みんな、「先生！ 先生！」と言つてもてはやす。そんな中、浮か
れているところやつて、手のひらを返したように痛い目にあうんだ。
俺の同期が何人も初任者のうちに辞めていった。それはみんな、「
先生」という名前のプレッシャーに負けてしまった奴らだ。自分の
楽しさよりも子どもの楽しさを優先させて、先生という名前に食い
殺された奴らだ。俺は、そんな風にはならない。子どもなんて、放
つておいても育つていく。俺自身がそうだったように。今、ワーワ
ーギヤーギヤー騒ぐ保護者達のように。

金子先生は、顔面蒼白のまま職員室を出て行った。教頭が俺に声
をかける。

「早見先生、もう少し残るか？ 校長先生ともう少し話をするから、
職員室出るときには一声かけてくださいね」

「わかりましたー」

校長、教頭と二人で金子先生の処分でも考えるのだろうか？ それ
とも、対策会議なのだろうか？ どちらにしても、自分のクラスで起
こった問題は、結局担任が何とかするしかない。だからこそ、あき
らめることが必要だと俺は思う。

金子先生は真面目だから、立ち直れるのかなあ？ 横で見ているに
は面白いけど、管理職の機嫌が悪くなつて俺にとばかりが来るの
はたまらないな。今日は帰ることにしよう。俺は、鼻歌を歌いなが
ら机の上を片づけることにした。

浜田孝の話

やっと今日も一日が終わった。長い長い一日だったなあ……大きなため息をついて、玄関の力ギを閉める。学校管理は教頭の仕事だ。毎朝六時には学校を開け、一番最後まで学校に残り、こつやつて十時を過ぎてから帰ることになる。その分、一般職に比べて給料はほんの少し高いが、それに見合わない仕事量であることは確かだ。少年団の活動も含め、休日も学校を開け、学校を閉めるのも俺の仕事である。女王蜂のために働く働き蜂といったところだろうか。女王蜂はもちろん、校長であることは言うまでもない。

辺りは真つ暗である。車に乗り込み、エンジンをかけて一服する。数年前から、禁煙の流れがやってきて、学校の中はもちろん、校地内は禁煙になった。今までは、職員室は煙草の煙でモヤがかかっていたほどだったが、今となってはクリーンそのものである。もちろん、喫煙者にとってみては肩身の狭い想いをさせられているのだが、こうして、夜遅くならないと、車ですら吸うことができない。前に、放課後の時間に車で吸っていた同僚は、子どもにその姿を見られた。その子どもは、何の悪意もなく保護者に言ったのだが、その保護者が町の民生議員だったものだから、ひと悶着起きていた。その同僚は、次の年僻地に飛ばされていた。どこで誰が見ているかわからない。身から出た錆ですぐに身を滅ぼすことになる、それが学校職だと思つた。

暗い車内で大きく煙草を吸う。肺の中が煙で満たされ、頭の中がクリアになっていくのを感じた。そして、今日一日のことを振り返る。

朝一で畠中先生が辞表を提出した。校長にも入ってもらい、説得をすることで事なきを得たが、あの手の仕事ができない教員は次に何か言われたらすぐにまた同じことをする。いわば、仕事のできない免罪符として、辞表をちらつかせるのだ。管理職にとって、退職

者を出すわけにはいかない。それは、管理のできない管理職、というレッテルを貼られることを意味する。その先に待つのは、より僻地の学校勤務、ドサまわりが待っているのだ。

その後、金子先生のクラスのいじめ発覚。いじめそのものの有る無しよりも保護者との間に起きた摩擦の方が大きいだろう。各学年一クラスしかいない本校のような学校では、担任だけではなく先生と子ども達の関係も深くなる。管理職である俺や学校長も子ども達の顔と名前くらいは一致しているし、問題のある児童には目も届く。柏木雅彦は確かに少し周囲とは馴染んではないが、俺のしている限りではいじめはなかったと思う。

しかし、大々的に保護者ともめてしまっただけはもう取り返しがつかない。いじめは、被害者意識が芽生えた段階でいじめとなる。いじめられている、という話を聞いた段階で、「それはいじめではない」と子どもに思い込ませることが重要なのだ。病は気から、という言葉があるように、いじめられていると認めさせない心の強さを持たせることが必要なのだ。

保護者からの話来た段階で誠意のある行動を見せ、真摯に対応していると思われれば大きなことにはならなかったはずだ。金子先生はその辺りの対応の仕方を間違えた。仕事ができる、と周りからチヤホヤされて自分でもそう思っていたのだろう。まさか自分のクラスからいじめられている子が出る訳ないだろう、とタカをくくっていたはずだ。その慢心が対応のミスを招いたのだと思う。

気が付くと、三本目の煙草に火をつけていた。帰るのがどんどん遅くなるが、家に待つ人もいないので問題ない。家で待っていた妻と子は、仕事ばかりにかまける自分に愛想を尽かして出ていった。仕方がないとも思う。二十四時間教師で居続けなければならない仕事なのだから。教頭になる前の一般職の頃は、休みも返上して仕事をし、クラスの子どもを我が子のようにかわいがり目をかけた。保護者からの信頼も得ることができていたし、地域から、教育委員会からの評価も高かった。そのかわりに家族からの評価は低かった。

家の中でも教師でいてしまった。父親である前に、教師で居続けたしまった。

家族が出て行った以上、俺は教師であり続けるしかない。養育費は払っているので、かろうじて父親としての義務は果たしていると思いたい。子どもの顔はもう久しく見ていないが。何歳になるのかも忘れた。

そこまですて俺は教師であり続ける。教師であり続ける以上は自分の考える学校を作りたい。それが今の俺の生きる糧だ。そのためには今の俺の評価を下げる訳にはいかない。金子先生には申し訳ないが、自分でなんとかしてもらえない。盾になってやるつもりはない。教師という仕事はそういうシビアなものだと、実感するのに高い授業料だとも思わない。

ギリギリまで吸った煙草を灰皿に押し付けた。この時間に一服すると、色々と思案にふけてしまう。少し反省しながら、俺はギアをドライブに入れた。

今日は全然眠れないだろう。

校長室に呼ばれ、教頭にたつぷりと絞られた。どうしてすぐに家庭訪問しなかったんだ！どうしてすぐに俺たちに相談しなかったんだ！クラスの子ども達に話をするのはなぜしなかったんだ！と怒鳴られ続けた。相談しようとしたら、自分でなんとかすれって言うたんじやないですか！と言い返したくもなかったが、そこまでの気力がなくなってしまった。言い返すこともできず、うなだれるだけだった。あのシーンを思い返すだけで、頭をかきむしりたくなる。なぜ、俺はもつとスマートに対応することができなかったのだろう。これでは、まるで仕事のできない教師ではないか。

このまま家に帰っても、悶々として眠れないだろう。かといって、酒に逃げるのも気に食わないので、いつものビリヤード場に車を止めた。学生時代から、暇さえあればビリヤード場に通り、練習を重ねている。腕前はプロ級、と言いたいところだが、実は全然上手くなっていない。下手の横好き、とは昔の人もよく言ったものだ。それでも、球を突いていると頭がスツキリする気がするので通ってしまふ。この町に来る前は、もう少し都会だったのでマンガ喫茶などにあるビリヤード台で遊ぶことも多かった。独り身というのは、こういう時に楽だなあ、と思う。こんな気分のまま、奥さんや子どもの相手なんてできるわけがない。

いつも来るビリヤード場は、ここ「ドーム撞夢」だ。北海道の田舎にあるビリヤード場なので、スタイリッシュさからはほど遠い。ずいぶん昔にあったビリヤードブームの時の産物で、二階建てのビルの一階にはゲームセンターが入っていたがとっくにつぶれ、それ以来「テナント募集」の紙が貼られている。この撞夢も時間の問題だろう。

この町に来た時から、小さなビリヤードと書かれた看板が気にはなっていた。赴任して一週間しないうちにドアを開けた。フロアに

は4台のビリヤード台が置かれおり、カウンターには髭面の無愛想な男が立っていた。

「こんにちは、ここ来るの初めてなんですけど、少し突かせてもらっていいですか？」

「一時間、五〇〇円」

初日の会話はそれだけだった。キューを借りて、一人でナインボールを始める。一から九までの的玉を、手玉を使って落としていく一番基本的なゲームである。ボールをセットし始めて、手入れがすさまじくしつかりとされていることに驚いた。シワ一つないラシャ（台に貼られている布）、キューは少しも曲がることなく高級感がある。タップ（キューの先についている皮）は少しもすり減っていないし、台に置かれているチョーク（タップにつける滑り止め）は新品同様だった。今までのマンガ喫茶に置いてあるようなビリヤード場とは天と地の差がある。こんな片田舎の町にあるビリヤード場にしておくにはもったいないくらいだ。

そのギャップにやられ、こうしてちよくちよく通うようになり、寡黙なマスターとも少しずつ会話もできるようになっていた。カバンをカウンター横の椅子に投げ、キューを受け取る。店内に客はいつものようにいないく、BGMである有線のジャズが静かに鳴っていた。

いつものようにナインボールを始めた。柏木さんとの電話を思い返しながら、手玉を突く。パカーン、という音と共に九つのボールが散った。的玉は一つもポケットに入らなかった。

それから一時間ほど没頭したものの、全く調子が出ない。やってもやっても、球はポケットに入ることがない。好きなことのはずなのに、うまくいかない面白くない。まさに、今の俺の仕事のようだ。ため息をつきながら、カウンターのマスターに声をかけてオンラインジューズを出してもらおう。無愛想なマスターが声をかけてきた。

「今日、どした？」

「なんか調子出ないんですよね……」

「迷いがあるからだろ。精神面がもろに出る」

「そんなもんですかね」

出してもらったオレンジジュースをすすりながらカウンターに目を落とした。このオレンジジュースは注文するたびにオレンジを絞って出してくれる。こだわりなのだろう。こんな田舎のビリヤード場ではありえないはずだ。

「少し一緒に突こうか？」

マスターがそんなことを言ったのは初めてだった。一緒に突いたことなんてない。

「えっ？いいですか？」

「いいよ」

とだけ言っ、マスターはカウンターの下からキューを入れているトランクを取り出した。中からキューを出して、台に向かった。俺は急いでオレンジジュースを飲みほした。

「ブレイクショットはお前からいいよ」

九ボールの形に球を組んでいたマスターが振り返らずに言った。言われるままにブレイクショットをする。一球も入らなかったのが、少し恥ずかしい。

九ボールでは、手玉を使って番号順に的玉を落としていく。的玉が入らなかつた時には突く人間が交代することになる。また、自分の番の時の玉に触れなかつたり、手玉をポケットに入れてしまつたりしてはファウルとなる。ファウルとなつたら、相手は自分の好きな所に手玉を置いてスタートすることができるのだ。

ブレイクショットで一つも入らなかつたので、マスターの番になる。マスターが一番の的玉から軽やかにポケットに入れていく。まるで、ポケットを巣穴をしている生き物かのようにスルスルと的玉は飲み込まれていった。

九番のボールまで交代することなくマスターは突き切ってしまった。容赦がない。少しくらい手加減してくれてもいいだろうに……
「もう一戦行こうか」

と言いながら、マスターはボールをセットしていく。ブレイクショットはマスターからだ。

「パカーン」

という心地よい音とともに、一つ、二つと穴に落ちていく。合計三つの球がポケットに入った。マスターがぼつりとつぶやく。

「思い切りが大事なんだよ」

「……思い切り、ですか？」

「そう。やりたいように思い切つてやらないと」

マスターはマスターなりに、俺のことを励ましてくれているのかもしれない。無愛想なものの言い方は相変わらずだが、嫌な感じはしなかった。

「ほれ、お前の番だぞ」

五番の的玉を落とすことができなかったので、突く順番が交代になった。俺は、今までより少し思い切り突いた。明日、自分の正しいと思えることを思い切りやってみようかと思えた。

五番の的玉は入らなかったけど。

柏木郁子の話

夕飯の片づけが終わり、やっと一息をつくことができる。ふと時計を見ると八時を回ったところだった。食卓にいるはずの息子に言った。

「雅彦、お風呂入っちゃいなさいよ。それから宿題ね」

声をかけては見るものの返答はない。とっくにリビングから二階の部屋に移動したようだ。ここ最近いつもそう。それというのも、五年生のあの金子先生のせいだわ。あの先生がいじめを放っておいたせいで、雅彦の心が閉ざされていったんだわ。

テレビでは、内容がぺらぺらのバラエティ番組がやっている。雅彦も前はクイズ番組などが好きで、私の知らないようなことまで当てて見せて驚かせてくれたものだったわ。それが今や自分の部屋にこもりつきりでパソコンをいじってばかり。夫が去年のクリスマスにパソコンを買ったことも問題だったかも知れないわ。

一〇分待っても部屋から出てくる様子もないので、二階に上がってみることにした。木製のドアには木彫りのプレートで、「まさひこ」とある。三年生の頃だったか、温泉旅行に行った際に家族みんなで体験教室を受けた。その時に雅彦が作ったのがこのプレートだ。細かいところまでよく彫れている。一時間の教室だったが、延長延長となつて結局三時間くらいになった。それくらい集中力のあるできる子なのだ。それなのに、それなのに……

ノックを試みるが、反応はない。どうしてもノックする力が入り、乱暴な音になる。

「雅彦、何してるの??」

ガチャリとドアを開けると、思った通り雅彦はパソコンに向かっていた。HDと一体になった高かったパソコン、「こんな高い物が本当に必要なの?」と夫には抗議したが、「どうせ買うならいいものが良いだろう。雅彦なら使いこなせるさ」と私の財布からカードを

出した。家計の中から買うのだから、自分の懐が痛む訳ではない。苦勞するのは、いつも私なのに。

イヤホンをしているので、聞こえないのだろうか？こっちに気づいている様子もない。

「雅彦、聞いているの？」

肩を掴んでこっちを向かせる。無表情な息子がこちらを向いた。雅彦は表情を変えずに、

「わかっているよママ。僕は風呂に入ればいいんだ」

と言って、立ち上がり部屋から出て行こうとした。その姿に感情を抑えきれなくなつて、肩を掴んだ。

「いつもいつも同じこと言わせないで！宿題はやったの？」

自分でもこんなにきつい声を出せることに驚いた。

「僕は宿題はやってないよ。学校に行かないのだから、やる必要もないよ。でも、自分で勉強はしたよ」

「自分で勉強つて……でも、いつまでも学校に行かないんじゃない？困るんじゃないの？」

「問題ないよ。ネットで見てみると、学校なんて行かなくてもやっていっている人つてたくさんいるんだよ。だから、僕はあんな学校なんてもう行かない」

目の前が真つ暗になる。ここまで息子の心は病んでいるのかと思うと、涙が出そうになる。そして、ふつふつと怒りがまた湧いてきた。

「そんなこと通用するわけじゃない！あなたをいじめている子たちを早くお母さんがなんとかしてあげるから、だからすぐに学校に行けるようにしてあげるから」

「クラスのみんながいじめてくるのだから、なんとかするなんて無理だよ、ママ」

雅彦はやはり感情を変えずに話す。どうしてこうなってしまったのだろう。

「私は……ママはね、雅彦に普通に学校に行つて楽しく過ごしてほしいのよ」

「僕は学校には行かない。じゃあ、お風呂に入るね」

と雅彦は席を立って行ってしまった。

今日の朝にも同じようなやり取りをしたわね、と大きなため息が出る。朝、いきなり、

「ママ、僕は学校でみんなにいじめられているから、もう学校には行かない」

と宣言をされて言葉を失った。

「誰に……どんないじめを受けているの？」

「みんなにだよ。クラスのみんなが僕の話をしてくれないんだ。僕の話したい遊びもしてくれない。みんな僕を友達にしてくれないんだ」

「クラスのみんなが……叩かれたり、お金を取られたりじゃあないのね？」

「そんなことはしないよ。だけど、もう僕はあの学校には行きたくない」

と言う話を延々と繰り返した。学校に電話もしたけど、何か事態が変化したわけでもなく、雅彦はずっとパソコンの前に座ることになった。ご飯の時間になると、下に降りてきて笑顔でご飯を食べる。

「僕はママの作ったご飯が大好きなんだ」

笑顔を浮かべて言ってくれるならこんなに幸せなセリフはないが、ここ最近雅彦の笑顔を見た記憶はない。無表情のまま生活をしている。抑揚のない声で言われても嬉しくはない。夕食の時に明日はなんとか学校に行ってもらいたいと話をした。雅彦の好きなハンバーグを作った。

「雅彦、一日学校休んでどう？明日は学校に行ったら？」

「お母さん、朝に僕は言ったよ。もう学校には行かない」

「でも、学校に行かなかったら困るじゃない」

「何が困るの？」

「……え？学校に行かなかったら、その後どうするの？勉強もしなくちゃならないでしょ？」

「勉強は家でもできるよ。学校の授業なんかより、自分で勉強した方がずっと早い」

「勉強だけじゃなく、体育とか音楽とかもあるじゃない。自分一人で勉強できないことだってあるでしょ。友達とも遊べないし」

「お母さん、学校でやったことで大人になって必要になったことは？」

「え、そ、そうね……」

「パツと思いつかないでしょ？音楽のリコーダーを吹いている大人を僕は見たことがないし、逆上がりをしてお金をもらっている人もいない。大人になって必要な勉強って何？買い物する時の算数なら自分で勉強できるよ」

「友達と……」

「友達はいないのも朝話したよ。だから、僕は学校に行く必要がないんだ」

「雅彦……」

「お母さん、このハンバーグおいしいね」

言葉がもう出なかった。雅彦の中ではもう学校に行くという選択肢がないように思えた。

一人残された部屋でふと画面を見てみると、ネットの巨大掲示板が映し出されている。こんなもの見るようになったから、雅彦の心が閉ざされていったのよ。消そうと思っただマウスをいじっているとふとどんなものを見ているのか気になった。履歴をクリックする。

「サイコパスの心理」

「世界の殺人者ランキング」

「心の闇を覆う物」

「学校なんて行かなくてもいい〜引きこもりからの社会人〜」

「よくわかる自閉症」

「誰でもできる仕返しのはやり方」

「少年犯罪法」

クリックをしながら、愕然とした。どうして私の子どもはこんな風

になつてしまつたの？私の育て方は間違つていなかった。なのに、こんな犯罪者予備軍のような子どもになるなんて……パソコンをたたき割りたくなる衝動を抑えて元の画面に戻す。今はまだあんまり刺激をしない方がいいわ。

部屋からそつと出て下に降りる。階段でお風呂から出てきた雅彦とすれ違つた。

「お母さん、僕はお風呂を掃除しておいたよ」

表情を変えないで雅彦はそう言った。雅彦に目を合わせることができない。

「……そう」

無理やり一言だけ絞り出して、キッチンに逃げ込む。ここは私の城。ここにいれば少し落ち着くことができる。

また、雅彦はお風呂を掃除した。毎回言っているのに。

「みんなが入るお風呂だから、勝手にお湯を捨てて掃除をしてはいけない」

と。怒鳴りつけ、時には頬をぶつこともあつたが、それでも雅彦はお風呂の掃除をやめない。しつげができていないということなのかしら？もつと厳しくしなくてはならないのかしら？それとも……雅彦が変なのかしら？

いや、違う。そうなのは最近。なら、やはりいじめによるストレスが原因だわ。あの担任とクラスのいじめが元凶なのよ。なんとかしなくちゃ、なんとかしなくちゃ。やはり私がなんとかしなくちゃならないわ。厳しく雅彦を叱りつけるだけじゃだめ。私は雅彦のことをわかつてあげなくちゃ。いじめがなくなるまで学校なんて行かなくていい。

そう思っていると落ちついてきた。お湯を沸かして、コーヒードリッパーに豆をセットする。こうやってコーヒーを入れている時間だけ何にも考えずに済む。私の城で私の時間を過ごす。こうしている時だけが幸せ。

ふと、思う。これは息子と同じようなものじゃないかしら？自分

の城に籠り、自分の好きな事をする。親子って似るのかしら？

誰もいない教室で、頬をパンパンと打つ。そして、「ヨッシャ」と気合を入れる。今日は入念に気合を入れた。今日が勝負だと思う。昨日はあの後、今日の授業の準備を入念に行った。雅彦だけに気をかけてはられない。学級経営は一つのほころびから一気に崩壊する、という話を聞く。一人の子どもに時間をかけすぎて他の児童を放置する。それによって、加速度的にクラスは荒れていく。そういう状況にする訳にはいかない。

「あ、先生、おはようございます」

「おはようございます。晃さん、今日は学校来るの早いね。早起きでもしたの？」

「今日は日直だから早く来たんだ。今日の目当て何にしようかなあ？」

「あ、日直さんだったんだね。今日もよろしく頼むね」
朝の心地よい会話だ。クラスの児童とは柔らかく接する。

「うん、今日は朝のスピーチでドラクエのこと話すんだ」

「そうかい、先生も昔はドラクエ好きだったんだよ」

「えー、そうなんだ〜！」

こういう会話を楽しいとは思わないが、こういう会話が子どもとの関係を作る。子どもの中で流行っているアニメやゲーム、どんどんと量産されるアイドルグループなどは確実にチェックしておいている。話が合う教師というだけで、一目置かれる。そういう努力すらしていない教師が多いので、それだけで差別化が図れるのだ。ひとしきりドラクエについて語っていると、日直の晃が聞いてきた。

「先生、今日はお休みいるかな？」

顔が曇るのを自分でも感じた。

「どうだろう？まだ連絡は来ていないよ。どうしたの？」

「いや、お休みいたらお見舞いカード書くからさ」

五年生ではお休みがいた時にはお見舞いカードというものを日直が書く。その日学習したこと、お見舞いメッセージなどを書いて届けるというものだった。昨日はあたふたして、書かせるのを忘れていた。こういう物から突破口を作ればいいのではないか？

「もし、お休み出たら書いて頂戴ね。昨日は雅彦さんが休んだけど、昨日の日直さんは書くの忘れたみたいだね」

「貴志だからしょうがないよ。先生、許してあげてね」

貴志はクラスで一番やんちゃな子だ。体は大きくて落ち着きがないから、よく周りの子とトラブルになる。しかし、根は優しい子で、飼育係の時には一生懸命お世話をするような子だった。

「いいよ。忘れることなんて誰もあるから」

晃との会話を切り上げ、職員室に戻る。時間は七時五〇分、まだ柏木さんからの電話はない。やはりここは先に電話をかけるべきか？それとも待つべきか？

五五分まで待って、こなかったらかけよう！と決心したが、やはり五五分になっても電話は来ない。かけようと思うが、やっぱり八時まで待とうかな？と気持ちが揺らぐ。電話とにらめっこしても仕方がないので、恐る恐る受話器に手を伸ばした。

リリリリリン

来た！後手に回ったことを少し後悔しながら、電話に出る。

「もしもし、北星小学校の金子です」

「もしもし、あ、金子先生ですか？柏木です」

「おはようございます。今、ちょうど電話かけようと思っていましたよ」

「そうですか。じゃあ、ちょうどよかったですね」

「ええ……で、どうですか？雅彦さんの様子は？」

「もちろん元気ないですよ。家の中でしょげています。先生、今日も一日休ませようと思うの」

「今日もですか……いじめについて何か言っていましたか？」

「クラスのみんなから避けられる、僕のことなんて誰も相手にしてくれない、って言っているって、昨日も話しましたよね」

「はい。でも、誰かが率先してそういうことをしているという感じはしないんですよ」

「その言い方だと、うちの子が元々クラスに馴染んでなかったっていうことになりませんか？四年生の春に転入してきて、それからずっと浮いてたってことですか？」

「浮くというとあれですけど……自分から、積極的に話しかけていくタイプではありませんよね？」

「家ではそんなことないわ。参観日なんかの様子を見ると、話しかけてないで自分一人の世界に入っている感じもなかったわよ」

「いえ、なんて言ったらいいのかな……」

「ここ最近そういうことになってるんじゃないの！だから、あなたの学級経営とか周りの子のいじめで雅彦は学校に行けなくなっただんではよ？もうちょっと真剣に考えてください。なんとかしてもらわなきゃ困ります」

「なんとかと言われましても……クラスの子には『いじめられていると言って学校に来れないんだ』と話してもいいんですか？」

「そんな訳ないでしょう？そんなこと言ったら雅彦がかわいそうでしょう？先生、デリカシーなさすぎですよ。だからいじめのことを気づかないんじゃないですか？」

「じゃあ、どうやっていじめている人を見つけていうんですか？」

「その辺りは先生がうまくやってくださいよ！あの貴志とか言う子とか、いっつも周りの子に乱暴だと言って言うじゃありませんか？たぶんあの子が周りにけしかけているですよ」

「そうやって雅彦さんは言ったんですか？」

「言っではないけれど、たぶん絶対そうよ。雅彦がちょっと勉強できるところから、ひがんでいじめてるんだわ。そうよ、貴志とかいう子を転校させてちょうだい」

「そんな無理な話……」

「とにかくどうにかしてちょうだい！それまで雅彦は学校に行けないんですからね！」

「と、とりあえず、雅彦さんって起きてますよね？少し話をさせてもらうことができますか？」

「起きてますけど、話したくないって言いますよ」

「聞いてもらえませんか？雅彦さんがどう思っているのか聞かなきゃ、対応もなかなかできません」

「担任なんだから、その辺りのことはわかるでしょう？問題が解決するまでは、話をさせることもできません。雅彦がかわいそうです」「いや、ですから、問題を解決するために、お母さんの口からではなく、雅彦さんの口からどういふことか知りたいんです」

「いやです。雅彦と話させたくないです」

「じゃ、じゃあ、今日の放課後とかお邪魔していいですか？電話じゃなくて、直接会って話をすることができたら、より……」

「無理です。もう、いいですから、なんとかしいてくださいよ！」
ガチャン、ツーツー

だめだ……柏木さんは明らかにおかしくなっている。当の雅彦はどういうことを話しているんだろう？四年生の始めに転校してきて話があんまり合わないとはいえ、クラスの中でもやってきていたはずだ。話しかけて無視されるとかいう感じではなかったはず。むしろ、雅彦の方が色んな人に積極的に話しかけていたように思う。それに対して、貴志が何か裏でしているとは考えにくい。

結局、雅彦とちゃんと話をしなきゃ事態は何も変わらないことがわかった。ため息をつきながら、机のコーヒーに手を伸ばすと、浜田教頭と目が合った。偶然目が合うというよりは、睨みつけられている感じだ。仕方がない、報告はしなくてはならない。

「教頭先生、柏木さんからの電話でした」

「見てればわかるよ。その感じだとやっぱり収穫なし所か、よりこ

じれたんじゃないか？」

「……すいません。いじめをなくせ、いじめていた奴を転校させる、家には来るな、で突っぱねられました」

肩を落しながら言うと、教頭の目がキラリと光った気がした。

「突っぱねられたじゃないんだよ！なんとかしなきゃならないだろう？？」

「そうですね……とりあえず、今日は具体的に動いてみます。クラスの子にそれとなく状況を聞いたり、子どもにプリントを届けさせたりしてみますね」

「頼みますよ。でも、なんとか周りの子が『いじめられて不登校』という事実には気づかないようにお願いしますね」

教頭はやはり点数稼ぎに必死なのだろう。俺が自分でなんとかするしか、やはり方法はないようだ。

とりあえず、さつき名前が出ていた貴志に当たってみる。貴志は遅刻ギリギリで学校に来るから、中休みに話を聞くことにした。

二時間目の終了のチャイムと同時に、教室から飛び出していきそうな貴志を手招きする。「うげえ」と絵にかいたような顔をする。呼ばれる「説教される、という図式が彼の中に出て上がっているのだろう。ま、あながち間違いではないけれど。昨日のお見舞いカードの件から切り出すことにした。

「何、先生？俺、なんか悪いことした？」

「何か怒られるようなことしたのかい？」

「いや……宿題、本当はやってきてませんでした。すみません。明日、やって必ず持つてきます」

苦笑いをしてしまう。でも、ここで正直に話せるということは、やんちゃに見えてもまだ子どもなんだな、と思う。

「宿題のことじゃないよ。昨日の日直のこと」

「え？昨日の？なんかあつたっけ？」

「日直の仕事、全部やったかい？」

「やったと思うけど……」

「お見舞いカードは書いたかい？」

「え？昨日お休みいたっけ？」

「雅彦さんが休んだでしょ、気づかなかったかい？」

「ああ、そうだね。んで、給食のプリンのおかわりジャンケンで勝ったんだ。お見舞いカード、書かなかった。すみません」

「いや、もういいんだ。でも、今回のカード、本当に書くの忘れていただけ？」

「え？なんで？」

「なんか雅彦さんにお見舞いカードを書きたくないのかな？って思っつて。雅彦さんのこと苦手だったりする？」

「いや、嫌いじゃないけど……」

貴志の顔が曇った。裏でいじめているから後ろめたい気持ちがあるのだろうか？

「けど……？」

「いや、なんかあいつ、ポケモンの話ばっかだし、こっちが何話してもポケモンの話に持っていくから、ちよつと、なんか……」

「それで避けたり、無視したりするのかい？」

グツと一歩踏み込む。貴志は慌てて言った。

「いやいや、そういうのはないけど、ちよつと困ったりはしてた。

だって、委員会の話し合いの時点にもポケモンの話ばかりなんだよ。最近はパソコンの話になってたっけ？なんかスペックがどうこうとか……わかんないんだもん」

少しすねた感じで言う。いじめている、というよりは困惑していると言った感じかもしれない。少し助け舟を出してやることにした。

「いや、いじめているとかは思わないけど、あんまり仲良くないよ。うな気もしてさ。どうしたんだらう？と思ったんだ」

「仲悪くはないよ。帰る方向同じだから、一緒に帰ったりするし」

「そっか。同じ方向だもんね。じゃあ、今日の日直とお見舞いカード書いて、帰りに届けてあげてくれないかい？」

「いいよ。今日の日直は真美だっけ？」

「真美さんには声かけておくからさ。よろしく頼むね」
「うん」

やっぱり雅彦はちょっと浮いている。自分の好きなことの話しかないから、周囲と馴染めていないというのは確実だ。それを嘆いて学校に来たくない、いじめだ、と言うのは果たして本当のいじめなのだろうか？

「ねえねえ、先生」

「ん？」

「雅彦って、なんで休んでるの？誰かにいじめられてんの？」

子どものカンは恐ろしい。ドギマギしながら返答するしかなかった。雅彦と関わりのある子にも何人か話を聞いてみたが、結局雅彦をいじめているような様子はなかった。ただ、口をそろえてみんな、「話が合わない」ということは言っていた。周りが合わせないのだろうか？それとも雅彦が合わせてないのだろうか？どちらにしても、「いじめられている」という雅彦の真意はどこから来るのだろうか？プリントは貴志に持たせることにした。

その放課後、また柏木さんから電話があった。

「先生、ふざけないですよ！」

「え？どうしたんですか？」

「どうしてあの貴志って子がうちに来るのよ。あの子にいじめられているのに、その子が来て雅彦が嬉しいと思う訳ないじゃない！」

「いや、貴志さんは昨日の日直でして、そして帰る方向も一緒だといつので持たせました。話はされたんですか？」

「する訳ないじゃない！インターホン押されても無視したわよ。雅彦の為よ。当り前じゃない！」

「雅彦さんが、無視したいって言ったんですか？貴志さんが来たから嫌に思ったとか？」

「雅彦はあいつが来たってこと自体知らないわよ。いじめっ子が家に来た、なんて言うと思います？どうしてあの子をよこしたの？デリカシーって言葉知ってます？昨日から私の話、何にもわかってな

いんじゃないですか？」

「貴志さんとは話をしましたよ。いじめなんて全くしてないって言うことでした」

「だから彼をよこしたってこと？私がウソをついているとでも言うの？そういう皮肉を込めてるの？」

「誤解ですよ。昨日の日直が彼で、お見舞いカードを書き忘れたので、今日の日直と協力して書きました。そして、貴志さんの帰り道に柏木さんの家があるので届けてもらっただけです。貴志さんは雅彦さんとよく一緒に帰るって言ってましたよ」

「雅彦と一緒に帰るのだから、どうせいじめるためでしょう！一緒にいるからこそいじめられるってこと、教師なのになんでわかんないのよ！」

「……他の子にもそれとなく話は聞いてみましたけど、特に雅彦さんに対して何か特別なことをしているって子はいませんでしたよ」

「じゃあ、うちの子もウソをついているって言うのね？いじめられているってウソをついているってことなのね？」

「いえ、けど、なんだか話が合わないって言う子もいました。なんかそういう話とか言ってますでした？」

「みんな僕の話聞いてくれない！って嘆いてましたよ。話が合わないっていうことじゃなくて、みんなが無視しているってことなんじゃないんですか？」

「そうじゃないですよ。僕が担任としてみても不自然に外したりってことはないです」

「だから！そういう風にするってことは、担任も含めた学級ぐるみのいじめじゃないのよ！雅彦の言うことが信じられてないって言うの？自分のクラスの子を信じられないって言うの？」

「ですから！ですから、雅彦さんと話をさせてくださいって言うているんです！いつでもすぐに駆けつけます。学校に来てくださってもいいですし、今からすぐにお邪魔しても構いません。実際に会って話をさせてください！」

「……だめよ。そんなことになったら、雅彦がかわいそうなもの……」

「どんなことをいじめだと思っているのか？何で苦しんでいるのか？それを解き明かさないと、心が休まらないんじゃないでしょうか？」

「……うるさいわね！わかっているわよ！だから、いじめられて心が痛んでいるんでしょう？雅彦とは話はさせません！早くあの貴志つて子を転校させてください！」
ガチャン、ツーッー。

もうだめだ。俺は職員室の天井を仰いだ。完全にこじらせてしまった。ここからどういう風に持っていけばいいか想像がつかない。完全にひねくれてしまっている。何を言っても堂々巡りのままだ……

…

真つ暗になった学校を背に車に乗り込む。車は、まだ家族が多かったころにかつたミニバンだ。一人では大きいし、燃費も悪い。そろそろ買い替えてもいいのだが、その踏ん切りがつかないのは、心のどこかに未練を感じているからだろうか。

エンジンをかけ、煙草を吹かす。一つ大きく息を吐いて、煙草に火をつけた。

金子先生の対応は遅い。仕方ないと言ってしまえばそれまでだが、不登校の電話を受けた初日は様子を見るだけで具体的な手立てを取らなかった。夜に学校長と二人で今後の対策について話をしたものの、次の日に取った行動と言えば子どもにプリントを持たせるだけ具体的な行動を取っていない。あれでは、解決するものもしないだろう。

だが、こつちも具体的なアドバイスをする訳にはいかない。そんなこととしてしまつては、こつちの責任になってしまいかねない。「管理責任」と天秤にかけたとしても、下手に首を突っ込まない方がいいと思う。

「金子先生が単独で取った行動なので……」
という、知らぬ存ぜぬで通せば問題ないだろう。

いじめの話を受けてから、今日で一週間。当の柏木さんからの電話もなくなり、音信不通。金子先生はどう動いていいかわからず、手をこまねいているようだが、そろそろ何か起きる時だろう。

とりあえず柏木さんから直接こちら側、管理職に電話がかかってくることは予想される。電話が来てしまつたら我々管理職も含めて対応をしていかなければならない。そうなつたら、金子先生には五年生の担任を外れてもらおう。そして、俺がクラスに入ってこの問題を解決する。そうすれば、その評価たるや相当のものだろう。来年度の人事は二月、まだまだ時間はある。

一本目の根元ギリギリまで吸って、灰皿に押し付ける。俺が若いころはどういう先生だっただろうか？金子先生のようにもがいて苦しんでいた時期もあったかも知れない。しかし、昔はもう少しやりやすかったようにも思う。保護者も先生、先生、と尊敬の眼差しで見えてくれていたように思う。俺が言ったことは絶対なんだ！と家でも教えてくれていただろう。それが今となつては、学歴の高い保護者からは、「所詮、先生なんだろう」とさげすまれ、逆に学歴の低い保護者からは、「簡単な仕事で高い給料もらいやがって、世間知らずのくせに」と妬まれる。嫌な世の中になった。

だからこそ、俺は校長に憧れる。校長になれば、教職という職業の中では一番上に立てる。俺は偉くならなきゃならない。偉くなりたい。

畠中先生はあれから辞めるとも言わなくなった。そっちの方も、注意が必要だろう。一年生のクラスも学級崩壊状態だ。あの後にクラスを持つ人は大変だろう。

その時には、俺はこの学校にいないから、知ったことではないが。

「最近、うちの子勉強しなくなっちゃったのよねえ……奥さんのところはどう?」

「うちの子もそう!全然言うこと聞かなくなっちゃった。困ったわ」「私の家の子はもう学校の勉強だけじゃ追いつかなくなっちゃって……だから、塾に入れようかと思っているの。どこかいいところないかしら?」

「駅前の塾はいいって聞いたわ。あの田中さん、通わせてるって話よ」

「田中さんって、あの三年生の子どもいる奥さん?三年生から塾通いなんて大変ねえ……」

「うちは少年団で忙しいから無理だわ。早見先生暇だからなんだろうけど、休みの日はずっと少年団入れているの」

「ありがたい話じゃない?一生懸命やってくれているんでしょ?」

「一生懸命なのはいいけど、休んだらレギュラー外されるもの。一生懸命通って、少年団の色々な手伝いして、やっとレギュラー取れるのよ」

「えー、そんなの大変じゃない?」

「大変なんてもんじゃないわよ。ここ最近はずっと練習試合。隣の小学校でやるからって言って、送り迎えしなきゃならないわけ。そういうのも休んだら、アウトだもの」

「けど、孝彦君なら多少休んでも実力でOKなんじゃないの?体も大きいし、体力もあるでしょ?」

「ダメダメ、その辺はポリシーあるのか早見先生は絶対そうするんだって。先生がそういう訳じゃないんだけど、六年生の晃君、それでレギュラー外されたらしいわよ」

「けど、それって子どもの問題だけじゃなくて、親の問題じゃない。なんか納得いかないわ」

「じゃあ、また教育委員会にメールしようかしら？」

「またつて、こないだメールしたの？」

「私はしなかつたけど、この前噂でメールしたって人の話は聞いたのよ」

「えー、誰？誰？遠藤さんとか？あの人、いつも先生の文句ばかり言ってるし」

「違うのよ。うちのクラスの柏木さんって話」

「本当？だって、柏木さんってあの柏木さん？なんか上品そうなお母さんじゃなかった？」
「でもね、お子さんの雅彦君、最近学校言つてないらしいわよ」

「あ、なんか私も聞いた。具合が悪いつて話を金子先生はしてるけど、実はいじめがあつたんじゃないか？つて、こないだ鈴木さんが言つてた」

「そうそう。それで、柏木さんと仲の良い北さんがね。だいぶ前にこのお茶会に北さん来た時あつたでしょ？あの時、教育委員会にメールする、しないの話したじゃない」

「あー、したかも。なんか北さん乗り気だつたやつでしょ？」

「そうそう。それで、北さんと柏木さんが会つた時にその話したんだつて。そしたら、柏木さん乗り気になつたみたいで。インターネットとか全然詳しくない人だつたのに、勉強して委員会にメールしたらしいわよ」

「えー、すごい！モンスターペアレントみたい！それでそれで？どうなつたの？」

「そんなに詳しくは聞いてはいないけど、まだ何も無いみたい。メールしたの聞いたのは一昨日くらいなんだけど」

「どんなメールしたのかしら？」

「なんか、『うちの子がいじめられているのに、担任は何もしてくれませんか。担任を早く変えてください』みたいなこと書いたらしいわよ。しかも金子先生の名前は出して、自分は匿名でやったみたいよ」

「よ」

「匿名なんだ！匿名じゃ聞かなさそうだよ。ってか、本当にモンスターじゃない？」

「うちの子、金子先生のことけっこう好きだから、変わったたら困るわあ」

「どうなのメガネ先生？いいの？」

「なんか一生懸命はやってくれてるみたい。授業もわかりやすいつて言うしね。けど、フレンドリーなタイプではないかな？」

「なんか真面目そうだもんね。インテリ系？な感じするもん。早見先生にも少し見習ってほしいわ」

「えー、早見先生の方がなんか楽しそうじゃない？」

「楽しいわ楽しいらしいけど、言葉遣いは悪いし、授業も何やってるかわからないって、浩太は言ってたわ。宿題すら出してくれないのよ！」

「今時、宿題出さないって駄目じゃない？」

「だから、塾に行かそうとしてるのよ。もう無理なもの」

「うちの子も入れようかなあ？入れるなら一緒に入れましょうね」

「もちろんよ。抜け駆けしちゃだめよ」

「あ、そろそろお開きにしない？帰ってくるわ」

「はい。じゃあ、今日も一人三〇〇円ね」

「はい」

今日で雅彦が学校に来なくなって三週間が経つ。他の子ども達には具合が悪いで通しているが、さすがにもうごまかせなくなってくる。子ども達も純真なのか、悪意があるのか、

「先生、雅彦君学校来れないのって本当に具合が悪いの？なんかお母さんが、不登校だって言ってたよ。不登校なの？」
と面と向かって言うてくるので、返答に困る。

「学校に来てないってことで不登校って言ったらそうかもしれないけど、具合が悪くて来れないってのは本当だよ」

ウソは言っていない。心の病は本当だから。

いや、心の病なのだろうか？ 柏木さんのお母さんとのイザコザが雅彦を学校に来れなくしているのではないのだろうか？

この三週間、プリントはおるか電話も何回もかけてきたが、ここ数日は電話もつながらない状態だった。柏木さんの要求は、いじめの解決を求めている訳ではなく、「担任を替えるか、斎藤貴志を転校させる」というものになっていた。それ以外の会話は成り立たなくなっている。管理職には何度も相談しているが、平行線のままだった。

正直なところ、電話が鳴るのが恐ろしい。電話がなると、その全てが柏木さんのように思う。そして、その電話先でこう叫ぶのだ。
「いつになったら担任変わるのよ！ さっさと降りなさいよ、役立たず！」

授業は今のところ滞りなく行えてはいるが、今後はどうなるかわからない。自分でも明らかに笑顔が減っているのがわかる。クラスの子ども達との会話も減った。何をどうしていいのかわからない。このクラスから降りたら、楽になるのだろうか？

過去に担任を降ろされた同僚を見てきた。その多くが授業崩壊が

引き金となる。授業が成立しないので、教務、教頭、校長などの時間を取ることができない教師が教師に張り付く。張り付かれた子ども達の心は荒んでいき、担任の心はより荒む。そのうちに担任が学校に来ることができなくなり、教務などがその担任の代わりに授業を行う。そして、担任は人知れず辞めるか、勤務先を変えることになるのだ。みるみる表情が消えていく担任を見て、同情しながらも情けなく思ったものだった。

しかし、今ならその気持ちがわかるように思う。何をどうしたら解決するのかわからないのだ。こじれにこじれた、関係の糸はほぐすことができない。いつそのこと切り捨てたくもなる。切ってしまうということとは、俺が担任を降りるということだが。

帰りの会を終わらせ、そそくさと教室を後にした。職員室に入ると、少し気持ちがほっとする。とりあえず今日も一日終えることができた。

できる教師が聞いて呆れる。自分の考えていた「仕事のできる教師像」はこんなはずではなかった。保護者との対応だって、もっとスマートに解決できるはずだったのに。

教科書を机に置いて力らなく椅子に座った。もう動きたくない。「金子先生、ちょっと校長室に来て」

教頭が優しい声で言った。優しい声はあくまで無理をして出しているのがわかった。目は全く笑っていない。また、何かあったんだろう。

「もう、なるようになれよ」

と心の中であきらめにも似た言葉をつぶやいた。自分でも、行くところまで行ってしまっただろうなあとわかっている。これ以上は何があっても驚かないつもりだ。

校長室に入って、教頭が口を開く。校長は外出中だ。

「金子先生、今、教育委員会から連絡があつて、金子学級では教師が子どもをいじめている、という匿名のメールが入っているそうだ」驚かないつもりだったが、そこまでやるのか！と驚いてしまった。

もう、完全に相手は手段を選んでいない。

「匿名……ですか？匿名って言っても、柏木さんしかいないですよ
ね？」

「まあ、間違いないだろうな」

と教頭は、いつもの苦虫をゴリゴリ噛んだような顔をする。

「……それで、どうなるんですか？」

「今、校長が委員会に行つて必死で食い止めている。これが、食い止めることができずに公表されたら終わりだよ。議会にでも話が行つたら、金子先生だけじゃなく、校長や俺も飛ばされることになるかもしれないな」

「そんな……そんなことになりうるんですか？」

テレビの中でしか知らなかったようなものが、こんなにも簡単に自分に降りかかってくるとは思わなかった。教頭は目を細めて続けた。

「もう、金子先生だけの責任っていう訳ではいかなるところに来て
いるんだ。俺や校長も含めて瀬戸際なんだよ」

「たかだか三週間子どもが来なかっただけ、しかもいじめの事実はない。そんなことで、僕たちが責任を取らされるんですか？」

「そうだ」

目の前がグワングワン揺れている。安定した俺たち公務員の安定つて、こんなにも儂いものだったのか？

「そこでね、金子先生、相談んだけど」

「……はい。なんでしよう？」

「あのさ、言いにくい部分でもあるんだけど。担任、降りてくれな
いか？」

「え？担任……をですか？」

「いや、今すぐとは言わないけど。このまま状況が良くなら
ないなら、俺たち管理職が入るなりしなきゃならないと思うんだ」

「そんな……」

「今まで時間はあつたし、なんとかすることもできたと思うんだ。
でも、なかなか改善はされなかった。それは俺たち管理職の責任で

もあるからさ。だからこそ、ね？」

絶句する、というのはこういう時に使うのだと思った。言葉が出ない。思考もうまくまとめることができない。

浜田教頭は苦く優しい顔をしようとする。無理をしていることはわかるが、教頭なりに担任を外れるというのは心苦しいのかもしれない。それでも管理職として、末端の教員の責任を取る気はなさそうだ。自然と睨みつけてしまっている自分に気づいても、もういい。

「明日からとは言わないさ。金子先生にも心の準備があるだろうしね。とりあえず、そういう心つもりをしておいてもらえたらと思う。ま、シヨックとは思っけど、君はまだまだ若いからさ、こういうこともあると思うんだ。気を落とさないで、な」

「教頭先生、俺……」

何か言葉を出さなきゃならないとは思っが、具体的な言葉は出てこない。そして、ほんの少し安心して自分にも気づいてしまった。俺は、担任から外されると言われて、ホッとしている。あの子ども達に、柏木さんにもう関わらなくていいと思って、よかったと思っている自分が確かにそこにいた。それは、ゆるぎない事実でもあった。

「いいんだ。なんとかするからな。金子先生の責任だけじゃあない。こういうことも、教員を続けているとあるさ。気にしないでいいからね。それじゃあ詳しいことは明日にでも話をするから。保護者説明会なんかも開かなきゃならないしね」

浜田教頭は、話を切り上げてしまった。それじゃあ、と言って校長室から出ていくので、俺もその後についていく。自分の席に座ってからも、しばらくは動けなかった。何をどうしたらいいのだろうか？わからなくなってきた。

呆然自失な俺に気づいたのか、目の前の岡部先生が声をかけてきた。

「金子先生、大丈夫かい？教頭からはどんな話だったの？」

「いや、ちよつと……大丈夫です」

となんとか虚勢を張る。自分でもわかつているけど、情けない。

「大丈夫じゃなさそうな顔をしているけどね。話してみることで、フツと楽になることってあるよ。柏木さんの話かい？」

岡部先生はにっこりと笑いながら話してきた。子ども達もこういう感じで接せられたら嬉しいだろうな。

「そうです。なんかもう行くところまで行っちゃって……教育委員会にメールとかも届いて。このままなら管理職も責任取れないって」

「管理職飛び越えて委員会かあ……今の保護者は容赦ないなあ。しつかりと手順踏まなきゃだめだろうに」

腕組みをしながら岡部先生は続ける。

「いや、僕も昔保護者とやりあったこともあつてね。けど、昔の保護者はしつかりと順番を追って行ってくれたんだ。まず担任である自分に話が合つて、それでも解決できなきゃ管理職、それでもダメなときは委員会に話が行く。そこまで僕は行ったことはないけど、その手順をしつかりと踏んでくれるなら、委員会に行くまでにけっこう話は解決するもんさ。でも、最近なら、担任すら通り越して委員会に行くから話がこじれる。保護者の方も、真剣になんとかする気がないんだな」

と一息で言うと、岡部先生は大きく息を吐いた。昔、何か嫌なことでもあつたのだろうか？とりあえず教頭に言われたことを相談してみたいが、話してもいいものだろうか？教頭は学校の見回りに行つて職員室にはいないから大丈夫だろうか？迷っていると、

「少し場所を変えて話した方がいいかな？仕事は落ち着いているかい？少し気分転換でもしにいかないか？」

と言ってくれた。こういう細かな気遣いができるから子ども達の信

頼を得ることができるとだろうか？

誘われるまま岡部先生の車に乗りこんだ。岡部先生の車は、VWのビートル。丸いフォルムが独特の雰囲気を持っている。堅実な性格の岡部先生がどうしてこんな車を選ぶのか不思議だったので、何気なく聞いてみる。

「岡部先生は、どうしてビートルに乗っているんですか？お子さんがいますよね？」

アツハツハと声をあげて笑いながら岡部先生は答える。

「その通りさ。うちの奥さんなんかはすごい怒っているんだ。こんな使いにくい車に乗らないでちょうだい！つて。でも、僕はここだけは譲れない。この形が好きなんだ」

なんだか意外な感じがした。岡部先生は、常に子ども達について考えている先生らしい先生だと思っていたのだが。

「この車に乗っている時だけは自分の時間だからね。ここだけは譲れない。家庭の事も、クラスの事も、ゼーんぶ忘れることができるからね」

「なんか意外です。クラスの事とか常にいろいろ考えているんだと思っていました」

「常に仕事の事を考えてちゃ疲れちゃうよ。フツと力を抜くことができるから、力を入れることもできると思っなあ」

「そうゆうもんですかね？」

「そうだと思う。柔よく剛を制すとは、昔の人も言っただもんだ。でも、剛よく柔を断つ、ともいうからね。どっちなんだ！つて突っ込みたくなるよね」

「へえ、僕、その言葉知らなかったです」
「勉強が足りないなあ、若者よ」

と言って岡部先生はニヤリとした。心地よい会話だった。さっきまでの柏木さんや教頭とのやり取りでピンと張った神経が、だんだんと解きほぐされているのがわかる。

しばらく、他愛のない会話をしていると車が止まる。

「さて、着いたよ」

「つて、ここ、撞夢じゃないですか？」

「あれ？知ってるの？」

「知ってるも何も、僕、よくここに來ますもん。学校からの帰り、突きに來るんですよ」

と少し興奮気味に話す俺の姿に、岡部先生はちよつと驚いたようだった。

「そうなんだ。俺も昔から突きに來てたけど、会わないもんだね。」

あ、そつか。最近は、俺、休みの日の昼間に來るようになったんだ。金子先生は、学校帰りの夜に來るんでしょ？だから、会わなかったんだね」

「あ、そつか。え？昔からつて、いつくらいから來ているんですか？」

「そうだなあ、今の学校に赴任してからだから、もう結構経つよ。当時はまだ独身で、金子先生みたいに夜遅くまで学校に残つて仕事していたもんさ。まあ、いいや。とりあえず突きに行こう」

と言つて車から出る岡部先生に続き、俺も車から出る。外車は国産の車より、ドアを閉めた時の重さが違う。ドスツと音を立てて、ピトルの扉が閉まつた。岡部先生と歩きながら話す。

「いやあ、懐かしいなあ。同僚と一緒に來ることも久しぶりだもんなあ」

「昔、ビリヤードやる人いたんですか？」

「うん。それこそ、今の金子先生みたいに初めは先輩に連れてきてもらったんだ。そこで、面白さをしたのがきっかけかな？大磯先生知ってる？五年前かな？六年前かな？それくらいまで、うちの学校にいたんだけど」

「知ってるも何も、有名じゃないですか！北星小学校に大磯あり！つて言われていますよ。詳しくは知らないけど、めっちゃうちゃ力があつて、バリバリだったつて話聞いてます」

大磯先生の名前を知らない教員はモグリだ、と聞かされたことがあ

る。子どもからも保護者からも絶大な信頼を得た先生だ。実践が新聞に取り上げられたり、テレビに出たりもしていたほどの先生らしい。

「大磯先生もビリヤード好きだね。たまに、学校帰りに突いていかないか？って誘われたりしたんだ。当時は、大磯先生も子どもがいて夜は早く帰りがかったただろうけど、たまに誘ってくれてたなあ」と岡部先生は懐かしそうに話した。

二階まで階段を上がり、扉を開けるといつものようにマスターが無愛想な顔をしていた。

「マスター、久しぶりに夜に来たよ」

マスターは無言でうなずいた。誰に対してもそっけない態度だと思われる。ちよつとほつとした。俺にだけ冷たいのかとも思っていたからだ。

「奥借りるよ」

と言って、岡部先生は千円札をマスターに渡す。

「いやいや、ちよつと待ってください。五百円払います」

と急いで財布を出しながら言う。キューを選びに入っていた岡部先生は、振り返ることもなく言った。

「じゃあ、そろそろ本題に入ろうか」

声のトーンが変わり、一瞬にして空気が張りつめたような気がした。俺は、なんだか知らないけどゴクリと生唾を飲んでしまった。

金子正一の話 8 (後書き)

あんまり更新しないのもあれなので… (笑)

短いけど、少しだけ更新します。

パカーン

音を立てて岡部先生はブレイクショットを決めた。9ボールを始めて、岡部先生がブレイクショットを決めたのだった。

ビリヤード場についてすぐにブレイクショットをどちらがするかを決めた。決め方は、二人同じ場所から球を撞き、ワンバウンドさせてどちらが手前の壁に近いかで決める。「バンキング」という決め方だ。岡部先生の方が近かったので、俺は「ラック」と呼ばれるひし形の木製の枠で、決められている通りに9ボールの形にボールをセツトした。

二番、四番の球がポケットに入る。キューの先に滑り止めのチヨークをつけながら、岡部先生は聞いてきた。

「なるほど、大体の内容はわかった。じゃあ、一つ質問、そもそもなんで雅彦が学校に行きたくないと言ったのか？その理由はわかってはいるのかな？」

始めから確信のついた質問だった。その答えはまだ出ていない。悔しいが、正直に話す他なかった。

「それが、実際にはわからないんです。柏木さんが言うように、いじめられているという雰囲気もなかったし、学校がそんなに楽しくない、という感じでもなかった。強いて言えば、若干友達の中から浮いてはいたようですが」

「ふーん」

岡部先生は、自分で質問しながらさして興味もなさそうに一番の球を狙い始めた。

「結果には必ず原因がある」

パカーン、カン、ゴトン。一番の的玉がポケットに落ちる。三番の球を狙うには少々キツイ場所に手玉が移動した。まっすぐに打ってはどっやっても的玉に当たりそうにない。

「例えば、今、まっすぐに打ってはどうかやっても的玉に当たらない結果になった。それはなぜかわかるかい？」

「その前のショットが原因だと思えますが」

「それも一つの原因だよ。一番を落とした時に、手玉が次に狙いやすい場所に行かせられなかったからね。でも、それが原因ではない」「え、だって、今の時にこの辺に手玉が行っていれば次の三番をすぐに狙えたってことですよね」

俺は、自分の持っていたキューで指し示しながら言った。

「もちろんそうさ。俺がさっきのショットで上手に狙えたらよかつたんだ。だから俺のせい。でもね、その前のブレイクショットもダメだったんだよ」

「それはないですよ。二つの球が入ったじゃないですか。ミスショットなら、一つも入らないですよね」

「でも、そのせいで今の状況を起こしているんだよ。もつと言えば、さっきラックを組んだ君のせいであるとも言える」

「そりゃ、いくらなんでもこじつけじゃないですか？」

「そういう見方もあるってことさ。柏木さんが君に強く当たるのがなぜか、深く考えたことがあるかい？」

「そう言われても。雅彦がいじめられているから、僕になんとかしろって言っているのだと思っています」

「だけど、いじめられてはいない？」

「はい。そう思えるのですが」

話をしていると、マスターがオレンジジュースを二つ持ってきた。相変わらず、注文を受けてから絞っているのだらう。量が少ない割に、ちょっと高い。

サイドテーブルにオレンジジュースを置いたマスターは、岡部先生に話しかけた。

「デジャヴかな？これによく似た光景を見たことがあるように思うのだが」

岡部先生が苦笑いしながら答える。

「やめてくださいよ。もう何年前ですかねえ。大磯先生も元気ですかね？」

二人には二人の過去があるようだけど、俺にはそれよりも岡部先生の言わんとしていることを、もう少し聞きたかった。話を遮るようにして、声を出す。

「岡部先生、さっきの話。柏木さんが強く当たるのは、雅彦がいじめられているからじゃないんですか？」

「うん、いじめられてはいないんでしょう？」

「…はい。と、思うのですが」

よくわからずに黙ってしまった俺を横目に、マスターが言う。

「自分で考えなよ。誰かに言われて出た答えつてのは、身につかないもんだ。岡部さんだって、そうだっただろ？」

「だから、昔の話はやめてくださいよ」

静止する岡部先生を無視してマスターは続けた。

「この岡部さんだって、前に大磯さんと一緒に球を撞きに来たもんだ。『学級がうまくいかない』『保護者からのクレームに耐えられそうにない』って、涙を流してたもんさ」

岡部先生は止めることができないと察したのか、照れ笑いを浮かべて、「撞かないなら、一人でやっちゃうよ」と言つて、キューを構えて9ボールの続きを一人で始めてしまった。

「岡部先生も、悩むことがあったんですね。今の様子を見ていたら、そんな悩みなんてなくて、若いころからバリバリと仕事のできる人なんだと思つてました」

「初めからそんな奴なんていないだろ。当り前のことだけど、そんなこともわからないのかい？そりゃ、さっきの話もわかんないよね」はつきり言われてしまつては、さすが心苦しい。ちよつと半べそをかいてしまう。

「今の若い先生つて、何か、人間的に幼いところが多いよなあ。わかつてないつていうか、表面的つて言うか。若いから仕方ないつて言つてしまえばそれまでなんだけどな」

ぐうの音も出ない。ここまで辛辣に言われると、反論もできない。マスターは寡黙なイメージがあっただけど、ずいぶんと饒舌にしゃべるのだな。よつぼど若い先生が嫌いなのもしれない。

「視点を变える、ってわかるかい？主観でしかものを見ていないから、問題を解決することができないんだよ。何で悩んでいるかわからないけどさ」

「視点？いろいろと考えているつもりですが…」

「自分の側からしか考えていないんだよ。主観的に物を語るから、解決しない。どうせ保護者ともめたりしているんだろ。お互いの主観でものをしゃべるから、いつまでたつても平行線なんだよ。そして、そのうちにお互いの人格否定が始まるんだ」

確かに、僕は柏木さんのことをモンスターペアレントだと思い始めていた。「そういう人だから仕方がない」という言葉に括り付けて「相手の気持ちを考えることができないんだよ。子ども相手だろうが、大人相手だろうが、そんなのは関係ない。人間として相手を尊重しないから、問題を解決できない」

黙々と球を撞いていた岡部先生が話に入ってきた。

「その辺りにしておいてあげてくださいよ、マスター。なんか、昔の俺を見ているようで、ちよつと心苦しいです」

笑いながら助け舟を出してくれた。

「岡部さんもそうだったよなあ。大磯さんと俺に説教されて、泣いてたっけ？」

意地悪く笑いながらマスターは続ける。

「だって、だって！って繰り返してたっけ？それが今や、後輩に指導する立場なんだから、偉くなったもんだ」

「それだけマスターも年を食ったんですよ。さっきから聞いてたら、ずいぶんキツク当たるじゃないですか？勘弁してあげてくださいよ」

「ちんたら言っただってわからない時もあるだろうさ。どうせ、岡部さんは優しく諭すんだろ。俺が嫌われ役になつてやるうかと思つてさ。昔は、大磯さんが嫌われ役で俺が助けてやったもんだっただけど

な」

と、そこまで話してマスターはカウンターに戻っていった。

「さて、結局、一人でやつちやったよ」

全ての球を落とし、新たにラックを組みながら岡部先生が話す。

「マスターの言うとおりだと思うよ。雅彦がいじめられているのか、いないのか、その事だけに目がいつているうちは、この話は解決しない」

「じゃあ、何をすればいいんですか？まともに柏木さんと話をすることもできないし…」

「それは、金子先生の考えでしょ？視点を変えなよ。どうしてまともな話ができないのか？どうやったらまともに話ができるのか？そして、柏木さんがクレームをつけてくるのはなぜか？」

ラックを組み終えた岡部先生は、笑いながら、「もう一ゲームしようか？少しストレス発散をしよう」と言った。

それから、他愛もない話をして過ごした。岡部先生もこれ以上何かを言ってもだめだと思ったのかもしれない。それくらい俺は落ち込んでいたようだ。

ちなみに、9ボールを計3回行ったが、全て俺が勝ってしまった。帰り際に、岡部先生が落ち込んでしまったことは言うまでもない。

店を出るときにマスターが一言だけ声をかけてきた。

「時間が解決してくれると思うなよ。自分で解決するしかないんだ」
その通りだと思う。この少しの時間で、俺は何かを感じ取っていた。それを言葉でまとめるのは、今はまだできないけど、何かが変わる、いや、変えることができるかも知れない、と思い始めていた。

「もしもし。私、北星小学校の金子と申します」

「何でしょうか？貴志って子が転校する手はずでも整いましたか？」

「いえ、そこまでは話が進んでおりません」

「なら、話すことはありません」

ガチャリ…ツーツー

やはり、電話では埒があかない。これまでと同じ方法では、話をするこすらできないのだ。放課後、忙しい職員室で俺は受話器を握りしめていた。岡部先生と、ビリヤードに行った次の日、授業が終わって意を決して電話をかけてみたのだが、結果は変わらなかった。浜田教頭がこつちを睨みつける。

「金子先生、どうですか？」

「ダメです。もう話は聞いてもらえないようです。もう、こじれすぎてしまって…」

「いえ、柏木さんとの話ではなく、先日話した件です」

口ぶりはとも柔らかいが、他の先生方もいる職員室で話す内容ではない。みんなの前で話をするということは、もう管理職の中では決定事項なのだろう。全く目の笑っていない浜田教頭は、話を続ける。

「もうそろそろ、いいでしょう。金子先生はまだ若い。今回も良く頑張りましたが、運が悪かったということですよ」

唇の端が少し上がる。目は笑っていないが、今までのように蔑むような目ではなかった。そのかわりに憐れみが含まれている。

周囲の先生方は、何事もなかったように仕事はしているが、ピンと空気が張りつめていることは感じる。自分のクラスで子どもに説教をする時の空気に良く似ている。なんとなくそんなことを感じた。

ここで、涙を流しながら、「すみませんでした」と言えば楽になれるのだろうか。来年度の人事も考慮してくれるだろう。幸いなこと

に、柏木さんの他の保護者からのクレームはない。話を知らない新一年生の担任なんかには配置してくれば、何事もなかったように暮らせるかもしれない。この躰きを糧にして今後を生きていくのも悪くないかも知れない。

だが、そうしないことは心に決めていた。

「…浜田教頭。明日まで待ってもらっていいですか？」

「明日でも明後日でもいいよ。だけど、決断を早くすることができれば、金子先生も楽になれるだろう？ 柏木さんのことは置いておいて、他の子のためにあと半年頑張ってくればいいのだから」

「わかりました。確かに現状のままでは、他の子にも悪いですし、教材研究なんかに力が入りません。ケリ、つけてきます」

「ん？ケリ？ケリってなんのことだ？」

浜田教頭が怪訝そうに聞いてくるが、もう知ったことではない。今日で勝負を決める。今日でダメならあきらめる。それは、もう決めたことだった。

「ちよつと、家庭訪問に行つてきます。何時になるかわからないので、そのまま帰ります。それでは、失礼します」

思った以上に大きな声を出してしまった。自分の狼狽ぶりがよくわかる。言葉に出してしまつたらもう後戻りはできない。周囲の先生も、呆然とこつちを見ている。浜田教頭は、一瞬唾然としたが、すぐに真つ赤な顔で叫んだ。

「ちよつと待て、家庭訪問つて柏木さんの家か？これ以上こじらせるのはやめる。話がつかなくなつたら、誰が責任を取るのだ？君は今年一年で終わりだけど、君の次に持つ先生が尻拭いをする事になるんだぞ！」

一瞬で怒りが沸点に達したのだろう。「今年一年で終わりだ」と大きな声で叫んだことを気にする様子もなかった。これ以上話をしていては、気持ちが悪えてしまうと思つた俺は、すぐに職員室を抜け出した。

「すいません、もう決めたことなので。それでは行つてきます」

「おい！待て！」

と教頭の声を背中に受けながら、俺は学校を出て柏木さんの家に向かった。

柏木さんの旦那は一般的にSEと呼ばれる仕事らしい。色々な企業のプログラムの調整を行っている。何か不具合が起きたら電話一本で、朝でも夜でもどんな時でも駆けつけなくてはならないらしい。もちろん雅彦とも関わる時間は少ないだろう。

比較的小さな一戸建ての家だった。外壁が薄いベージュで屋根は紺、小さいながらも庭があり、手入れの行き届いている辺りが家の人間の性格が出ている。たぶんA型だろうな、となんとなく思った。ピンポンとインターフォンを押す。しかし、反応はない。自転車が庭にあったので、外出はしていないのだろう。だとすれば、インターフォンで俺が来ているのがわかつているのだろう。雅彦が学校に来なくなつて、一か月ほど経つ。その間、クラスメイトが入れ代わり立ち代わり手紙を届けに来ていた。それを迷惑に思い、「もう子どもをよこすな！」という電話もあつたことを思い出した。門前払いをするのだろうか。

もう一度、押す。しかし、当然ながら出てこない。会つて話をしないことにはどうしようもならない。緊張でカラカラにのどが渴くが、つばを飲み込んでもう一度押す。そして、もう一度。

何度も何度も押したものの柏木さんは出てこない。ここまでしているのに！と怒りを覚えるが、逆に、「なぜここまでしても話をしないか？それはなぜだ？と心をよぎるが、ここまで来てしまつてはもう後戻りはできない。

仕方なく、ドアに手をかける。予想に反し、カチャリと音を立てて扉は開いた。意を決して、中に入る。

「すみませーん。北星小の金子です。柏木さーん！いませんか？」
遠慮がちに声を出す、中から出てくる様子はなかった。

「すみませーん！柏木さーん！」

大きな声を出す。整理された玄関には、柏木さんのものである靴と、雅彦のものであるとが並んで置いてあるので、留守ではない。その時、奥の方で物音がして、柏木さんが顔を出した。明るめの色のワンピースを着ているが、髪はボサボサでくたびれた印象を受けた。この家の雰囲気には合っているけど、人間は合っていない。他の家の人間が、この家の住人を装っているような印象を受けた。そして、案の定、顔は烈火のごとく怒っていた。俺は、なるべく刺激をしないように言葉を選びながら話す。

「すみません、勝手に入ってしまった。でも、どうしてもお話がしたかった…」

「ふざけないで！不法侵入よ！なんて、常識がないのかしら？おかしいとは思わないの！何にもできないくせに、人の家にまで入ってどうということ？何が話したいよ！笑わせないで」

一息で言い切られ、あつという間に心が折れてしまいそうになる。

「すみませんでした」と言って、ドアを開けて帰ることができたらどれだけ楽だろう。

「何とかいいなさいよ。校長に電話するだけじゃすまわないわよ。警察に電話もしなきゃ」

「ちよ、ちよつと待ってください。少しだけお話をさせてください。僕も何とかしたいと思ってはいるのですが」

「何よ、都合のことばかり言ってる。そうよ、また、教育委員会にも電話しなきゃ！」

そこまで言って、ハツと柏木さんは手で口を覆った。

「教育委員会に電話されたんですね…だから、か」

予想はしていたけど、やはり先日の「担任を降りてくれ」は上からの圧力がかかっていたのだ。予想が真実だとわかった今、俺に残さ

れている道は二つしかない。

「な、なによ！何か文句あるの！校長に言っても何も変わらないんだから、教育委員会に言っただけでなんとかしてもらえないじゃない」
動揺を怒りで隠そうとして大きな声で柏木さんは叫ぶ。大声を浴びながらも、俺の心は少し落ち着いていた。この話し合いをなんとかしてやり直すことができる道と、担任を降りる道、二つしか選択肢がないならやりたいようにやってやる。俺は大きく息を吸い込むと、真正面から柏木さんの目を見た。

「いいかげんにしてください！もっと前向きになんとかするって話にならないんですか？」

反撃を受けて柏木さんは一瞬ひるんだが、すぐに元の調子で言葉を続けた。

「前向きって何よ！前向きに考えているから、あんたが担任を降りればいいって話でしょ？」

「僕が担任を降りたら、雅彦はいじめられなくなるんですか？」

「だから、あの貴志って子も転校させなさいよ。雅彦がかわいそうだわ」

「言っていることめっちゃくちゃだつてわからないんですか？雅彦のために、雅彦のために、って言っただけで邪魔なものを排除して、その先に何が残るんですか？」

「わかったような口を利かないでよ。担任として何もできないくせに」

「だから、何とかしようとしてくれているんでしょう！こんな不法侵入みたいなことをしないと、まともに話すらできないんですから！それで、どうにかしろって？笑わせるなよ！あんたは、親失格だよ！」

熱くなってきたのはわかっていたが、あつと思つた瞬間には、もう遅かった。

「何て口を利くのかしら、まだまだ若いくせに！それがあんたの正体なんでしょ？もう話なんてないから、出ていってちょうだい。親

失格ですって！親になったこともないあんたがよく言えたもんね」
明らかに柏木さんの様子が変わった。もうなりふりを構っていられない、という様子だった。

「い、いや。口が過ぎました」

「もういいわよ。名誉棄損で訴えてやる。ふざけんじゃないわよ。早く出ていけ！」

と言いながら、その辺りのものを投げつけてきた。スリッパ、靴べらなどを受け止めながらなんとかなだめようとする。

「言いすぎました。ごめんなさい。落ち着いてください」

「謝らなくていいから、早く出ていって！」

小さめの観葉植物の鉢を投げつけられた時、さすがに体で受け止めることはできなかつたので避けた。鉢は、玄関のドアに当たり砕け散った。中の土が辺りに散らばり、予想だにしなかつた最悪な状況になる。

「柏木さん、すみません。なんとか落ち着いてください」

「あんたのせいよ。あんたが来なきゃ、こんなことにはならなかつたのよ。もういいから、帰ってよ…」

周りに投げる物がなくなり、肩で息をしていた柏木さんは落ち着くかと思つたら、今度は血相を変えて掴み掛つてきた。

「もういいから出ていきなさいよ。もう、いいって言っているじゃない！早く出ていけ」

「ちよ、ちよつと柏木さん。落ち着いて」

「早く出ていけ。もういい。あんたがここからいなくなることを私は望んでいるのよ」

無理やり玄関から押し出されそうになる。ここで外に出ていってしまつたら、カギをかけられてもうおしまいだ。ここまでこじれたなら、警察ざたにもなつてしまつたろう。俺も必死だった。

「ちよつと待つてください。柏木さん」

大声で叫ぶが、髪を振り乱しながら掴み掛る柏木さんには通じない。もうだめかも、と思つた瞬間、自分でもどうしてそうしたかわから

ない中、俺は叫んでいた。

「雅彦！出てこい！お前はどっ思っているんだ！この状況を！」
柏木さんが敏感に反応する。

「やめてちょうだい！雅彦には関係ないじゃない！いいから出てけ
つて、この！」

「雅彦！いるんだろ！出てこい！先生と話をしよう。お前はいつた
いどう思っているんだ？いじめられているのか？なんで学校に来な
いんだ。答えろー！」

これ以上出ないって大声で叫ぶ。すると、二階の方からストンスト
ンと雅彦は階段を降りてきた。柏木さんが叫ぶ。

「雅彦！出てくるんじゃないって言ったでしょ！」

その声を無視して雅彦が言った。

「僕は自閉症だから、学校に行かないんだよ」

一瞬、時が止まったような気がした。「？」マークが音を立てて出
てくるかないんじゃないかってくらい、俺はポカンとしてしまった。
しかし、柏木さんの力が抜けて、へたり込んだ時に状況を理解した。
「僕は自閉症だから、学校に行かないんだよ」

同じフレーズをもう一度繰り返し、焦点の合わない目で雅彦はこっ
ちを見た。柏木さんはへたり込んで、すすり泣き始めた。

全く予想していなかった状況を理解した俺は、辺りを見回す。ぐ
ちゃぐちゃになった玄関、へたり込んで泣く柏木さん、そして自閉
症の雅彦。

何を、どう始めていけばいいのだろう。泣きたくなったのはこっ
ちだ。

コポコポとドリッパーにお湯を注ぐ。「の」の字に。焦らないようにゆっくり、そして均一に。コーヒー豆がプクツと膨らんで来て、鼻の奥をくすぐる心地よい香りを放つ。感じながら、大きなため息を一つ、意識してついた。ため息をつくときと幸せが逃げるといふ話を聞いたこともあるが、すつと頭の上の方が軽くなった感じがした。

ふと時計を見ると、一〇時を少し回ったところだった。雅彦はもう寝ている。夫は、今日も遅くなるという。遅くまで働いて来る夫のおかげでこの家が建った。感謝はしている。愛情を感じているかどうか？と問われたら答えにつまることもわかっている。

今日は大変な一日だった。とうとう、あの担任に雅彦のことがバレてしまった。

雅彦が自分のことを自閉症と申しだして、もう一週間になるだろうか。朝、いつもと同じように雅彦の事を起こしに行ったら、いつもは布団にくるまっていては着替えをして勉強道具を準備していた。やっと学校に行ってくれるのね！と嬉しくなって、駆け寄ったら地獄に突き落とされた。

「お母さん、僕は自閉症です。自閉症だからいじめられていたのではないのです」

「え？」

「僕はいじめられていたのではないのです。だから、学校に行きません」

「ちょ、ちょっと待って、自閉症だって誰が言ったの？どこでそんな言葉…？」

「自分で調べました」

「自分で調べたって…そんな…」

聞くと、パソコンを使って膨大な知識を得たようだった。確かに雅彦は子どもの頃から興味のあることの知識は膨大だった。それは、

ゲームのキャラクターの名前を全て言える、好きな車の一部分だけ見て車種を当てる、などのような趣味の分野だけの事だったのだが、もちろん親としてその疑いがなかったとは言わない。子どもの頃から受ける検査では、何回も「発達障害の疑い有」という判定を受けている。しかし、親としてそんなことを受け入れることはできなかった。

それを、まさか息子の口から認める言葉が出るなんて思いもしなかった。

なんとか息子をなだめ、学校に行かせるのは思いとどまらせた。ほとんど、納得はしていなかったので、ほぼ無理やりだった。自分でこうだと思っただら意思を曲げない、それは学校に行かない、と言った時もそうだ。今度は学校に行くと言っただらテコでも動かない様子が見られた。それこそ、よく言われる自閉症特有の「こだわり」の部分なのだろう。

なんとかなだめることができた後に、絶望感に襲われた。そして、その絶望感は怒りに変わり、それは担任に向かった。激情の中、その辺りの分析はできていた。しかし、私自身を突き動かす感情の嵐に、私は抗う術を持たなかった。

コーヒーが落ち、それをカップに移す。椅子に座り、コーヒーを飲む。おいしい、と思わなかった。ただ、いつも飲んでいる香りを味が、私の細胞を刺激するだけだった。

ありもしないいじめについて文句を言っているのはわかっていた。解決策が見つかる訳もないし、事態が好転することがないこともわかっていった。ただ、現実を受け入れられない自分と、それを客観的に見ている自分がいた。行動に移る自分を止める自分に、力はなかった。

雅彦が「自閉症」だと金子先生に告白してから、先生は玄関掃除を手伝ってくれた。雅彦とは、ポケモンの話などをしていった。自閉症、という話題からは遠ざかるように。それは、彼の優しさというよりは、戸惑いだったのだと思う。私と同じだ。

自分とは違うものを前にした時、どうしてよいかわからなくなる。理解ができないものを前にした時、今までの自分が通用しない時、自分が否定されたように感じるからだ。彼もそうだったのだろう。いや、薄々は気づいたのかも知れない。

それも、どうでもよい。

底にたまったコーヒーは、泥ような色をしている。苦々しい気持ちで、泥水をすすった

教育委員会との電話を終え、受話器を置く。いつも思うが、教育委員会つてのはやつかいだ。現場の気持ちや全くわかってくれない。それもそうだ。彼らは教師ではないのだから。所詮役人だから、こちらと意見が合わないことは当たり前だ。

だから、

「柏木雅彦を就学時指導検討委員会にかけますか？話ではいじめられて不登校だつて聞いてますよ。保護者をなんとか騙して、隠ぺいに入ってるわけじゃないですよ？もし、マスコミにバレたらとんでもないことになりますよ。校長の判断は下りているんですよ？私たち委員会は、知らぬ存ぜぬで通しますからね。いいですか？」

とか、失礼なことをズケズケと言ってくるのだ。

柏木雅彦は、現在元気に登校している。不登校になっていたことを感じさせないほどだ。しかし、ただ一つだけ変わったところがある。それは、

「僕は、自閉症だから君たちとは違うんだよ」

と話すようになったことだ。もちろん、周りの児童は今一つ「自閉症」という言葉の意味はわかっていない。きょとんとしているが、その言葉の持つ不穏な空気は感じるのだろう。ことさら追求せず、着かず離れずで接している。

「自閉症」という言葉が一人歩きするようになってもうずいぶん経つ。他にも、「アスペルガー症候群」「ADHD」というような言葉もテレビなどでよく耳にするようになった。

他の人と違う、それが「病気」であるとするのは、何とも日本人らしい風潮にあるように思う。そして、それを気にしすぎるのも、右へならえの精神なのだろう。あのレオナルド・ダ・ヴィンチもアスペルガー症候群だという話もあるくらいだと言っのに。

「教頭先生、委員会、何と言っていましたか？」

目の前には、金子が立っていた。若く、まっすぐで、イラつかせる。自分の行う一つ一つの行動が、どう周りに影響するか全く考えしていない。もちろん、俺にもそんな時期はあったのだが、とも思っ

が。
「委員会は、ゴーサインを出したよ。十二月にある就学时指導見当委員会にかけて、診断が出れば、来年度は特別支援学級に入ることになる」

「わかりました。よろしくお願いします」

話が終わったので席に戻るかと思ったら、金子は思いつめたような顔でまだ立っている。黒縁の大きなメガネを直しながら、話しかけてきた。

「教頭先生、失礼を承知で聞きます。これから雅彦はどういう流れでうちの学級から離れることになるんですか？正直、よくわかっていないんです」

この手の多少自分ができると思っている奴はあまり人に聞いたたりしない。特に、「自分を認めている人間」に対しては心を開くが、俺のように厳しく接している人間に対しては心を閉ざす。何とか弱みを見せないようにする。それが自分の損になることに気づかず。柏木さんのやり取りで、多少なりとも成長したのだろう。部下の成長に快くした俺は、話に付き合っ

てやることにした。
「聞けるってのはいいことだな」

「すいません。調べては見たものの……言われたように柏木さんには、『今度就学时指導検討委員会というものに出席させたいと思います』と話して、許可は取ったのですが」

「柏木さんとは話ができるようになったみたいだな」

「ええ、なんとか。何か、雅彦が学校に来るようになってから、抜け殻のようになってしまいました。何を言っても、『わかりました。よろしく願います』って」

「基本はそうだよなあ。金子先生も親になればわかるさ。自分の息

子が『規格外』となる訳だからな」

「規格外って言い過ぎではないですか？」

金子は、ちよつと熱い口調で言う。

「しかし、特別支援学級の担任は8%多く給料をもらっているのは知っているだろう？」「はい。それはわかっています」

「8%分多くもらっている教師がマンツーマンで指導してくれる。これが規格外でなくて何なんだ？それだけ金とマンパワーをかけなければ、普通に生きていくことができないのが、特別支援教育なんだよ」

「……わかりました」

明らかに納得していない顔で金子はうなづいた。この辺りの議論をするのは面倒なので、話を本筋に戻した。

「まあ、いい。就学时指導検討委員会の話だな。その委員会には、精神科医が参加するのはわかっているな？」

「はい」

「ようするに、その精神科医が『自閉症ですよ』と診断を下さなければ、特別支援学級は作ることができない。当り前だよな。一人分の教師が必要になるのだから。また、その教師は8%分給料が高くなる」

「え、じゃあ、どうしてわざわざ委員会が主になってそんな先生を読んだりするんですか？」

「そんなの当り前じゃないか。金子先生が自分の子ども連れて、病院に行きたいと思うか？自閉症ですね、って言われたと思うか？」

「思いません……」

「だから『就学时指導検討委員会』って名前をつけて、名目上は教師陣が話し合っただけよ。だから、診断書さえあれば、柏木さんが参加することはないんだよ。診断書をもとに、参加メンバーで話し合っただけよ。診断書をもとに」

「そうですね。よくわからなかったです」

「ただ、難しいことに、今の特別支援教育は人権とも関わる。さっ

きの規格外の話に戻るが、自分の息子が規格外だと言われたら頭に
来る。何もわかっていない若い教師にそんなこと言われるのは人権
侵害だ！ともなる。だからこそ、医師を呼んで診断を受け、その証
拠をもとに説得する、ということなんだ」

「じゃあ、柏木さんが納得しなければ、その先の流れはないってこ
とですか？」

「そうだよ。気をつけるよ。俺達はいくまで、『特別支援教室とい
う考えもありますよ』と促すだけであって、『特別教室に入ってく
ださい』とか『特別支援教室に行きなさい』と言ってはならないん
だ」

「じゃあ、結局、その説得させる場が、就学時指導検討委員会とい
うことなんですか？」

「ま、簡単に言うそうだな」

「……全然わかっていませんでした。そして、さっきの電話で雅彦
がその就学時指導検討委員会に参加することができるってことにな
ったんですね」

「そういうことだ」

大きなため息をつきながら、金子は最後にポツリと言った。

「なんで、こんなにわかりにくいんですかね？」

「そりゃあ、あれだろ」

当たり前な話をしてやった。

「誰も、自分で責任取りたくないんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0935q/>

先に生きている

2011年12月11日08時47分発行